三重県埋蔵文化財調査報告 264

戸井口遺跡・スブクリ遺跡（１・２次）
発掘調査報告

2005（平成17）年12月

三重県埋蔵文化財センター

序

このたび、中山間事業（茅広江地区）広瀬工区下茅原ほ場整備事業に伴って消滅していく戸井口遺跡とスブクリ遺跡の一部を発掘調査いたしました。

当遺跡の存在する松阪市は、宝塚１号墳や松阪城をはじめとする数多くの歴史的遺産が存在しており、三重県の歴史を究明するうえで重要な地域となっております。

今回の調査結果を概観いたしますと、江戸時代前期の掘立柱建物２棟などが確認されました。

このように当地域の歴史を追究するうえからも貴重な資料を得ることができました。

消滅した遺跡に代わり、発掘調査の成果が郷土の歴史ひいては文化を伝え、活用されていくことを切望いたします。

なお、文末ながら、協議から発掘調査にかけて多大のご理解とご協力をいただいた県農林水産商工部並びに松阪地方県民局農林商工部、松阪市教育委員会、茅広江地区土地改良区をはじめ、発掘調査にご助力をいただいた地元の方々に心より感謝申し上げます。

2005年12月

三重県埋蔵文化財センター
所　長　　吉　水　康　夫

例　　言

1　本書は、三重県松阪市広瀬町字戸井口に所在する戸井口（といぐち）遺跡の第１次発掘調査（以下戸井口遺跡)、スブクリ遺跡第１次発掘調査（以下スブクリ遺跡（１次))、スブクリ遺跡第２次発掘調査（以下スブクリ遺跡（２次)）の成果を合冊した報告書である。

2　調査は下記の体制で実施した。

【戸井口遺跡・スブクリ遺跡（１次)】

調査主体　　三重県教育委員会

調査担当　　三重県埋蔵文化財センター

調査研究第Ⅱグループ　　奥野　実（戸井口遺跡主担当）

小山憲一（スブクリ遺跡（１次）主担当）

大村伸一（教員研修、多気中学校）

発掘作業受託者　　株式会社中部日本鉱業研究所

【スブクリ遺跡（２次)】

調査主体　　三重県教育委員会

調査担当　　三重県埋蔵文化財センター

調査研究Ⅰグループ　　新名　強（主担当）

豊田祥三

3　本書の執筆は【戸井口遺跡】奥野実と大村伸一、【スブクリ遺跡（１次)】小山憲一、【スブクリ遺跡（２次)】新名強が行ない、遺構の撮影は各担当が、遺物の撮影は、戸井口遺跡を大村伸一、スブクリ遺跡を新名強が担当した。なお、文責は目次と文末にも表記した。

4　各遺跡の調査面積・調査期間は下記のとおりである。

戸井口遺跡　2.630㎡・平成15年５月16日から平成15年11月25日

スブクリ遺跡（１次）407㎡・平成15年８月18日から平成15年８月26日

スブクリ遺跡（２次）900㎡・平成16年５月７日から平成16年５月19日

5　発掘調査及び本書の作成に際しては、下記の方々にご指導・ご協力をいただいた（敬称略)。

藤澤良祐・広瀬町区・茅広江土地改良区・櫛田川河川漁業協同組合・松阪市教育委員会・三重県農林水産商工部・松阪地方県民局農林商工部

6　発掘調査の原因事業は、戸井口遺跡・スブクリ遺跡１次調査は平成15年度中山間事業（茅広江地区）広瀬工区下茅原ほ場整備事業、スブクリ遺跡２次調査は平成16年度中山間地域総合整備事業（芽広江地区）である。

7　発掘調査の経費は、三重県農林水産商工部と三重県教育委員会が負担した。

8　本書が扱う発掘調査の資料並びに出土遺物等は、三重県埋蔵文化財センターが保管している。

凡　　例

＜地図類＞

１．本書で使用した地図類は、国土地理院発行の１／25,000地形図、松阪市都市計画図である。

２．これら地図類は、国土調査法の日本測地形による座標第Ⅵ系（旧国土座標）で表現されているため、平成14年から施行されている日本測地形2000及び測地成果2000には対応していない。

３．挿図の方位はすべて座標北で示している。なお磁針方位は西偏６°40′、真北方位は西偏０°17′34″（平成10年）である。

＜遺構類＞

４．土層図は、層の区分を実線で、調査区壁面及び採録深度に相当する部分を一点破線で表現している。また遺構面や層位の大区分となる層については、他の土層面よりも太い線で表現した。

５．土層図の色調は、小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社　1967年初版）を用いた。

６．当報告書での遺構は通番となっている。戸井口遺跡ではＳＫ26、ＳＫ29については、調査時には遺構の扱いであったが調査途中に撹乱と判断したため、当報告書では欠番としている。またＳＫ３については、調査時にはＳＤ３であったが調査途中に土坑と判断したために変更した。

７．遺構番号の頭には、見た目の性格によって、凡そ以下の略記号をつけている。
ＳＤ……溝　ＳＫ……土坑　ＳＢ……掘立柱建物　ＳＺ……落ち込み・不明遺構等　Ｐｉｔ……ピット、柱穴

＜遺物類＞

８．当報告での遺物実測図類は実物の1/4を基本とし、各遺跡毎の通番となっている。

９．遺物観察表は、以下の要領で記載してある。
報告書№…挿図掲載番号である。
登録番号…実測段階の登録番号である。
器種…遺物の器種を示す。
遺構・層位…遺構の出土した遺構や層名を記した。
計測値（径・器高　㎝）…遺物の法量を示す。径は口縁部径、器高は遺物の高さを示す。欄内に記載された口は口縁部径、底は底部径、台は高台部径を示す。なお数値はそれぞれの部位の実測段階の接地点で計測している。
残存度…ある部位を12分割した際の残存度を示した。全体が残っているものは完存と記した。
調整・技法の特徴…主な特徴を内面（内：）・外面（外：）で示した。「Ａ→Ｂ」はＡの後にＢが施されたことを示す。
胎土…小石等の混和材を除いた素地の緻密さを「密～粗」で区分した。
焼成…遺物の焼き具合を見た目によって「良～不良」で区分した。
色調…その遺物の代表となる色調を記載した。表記は、前掲『新版標準土色帖』による。
特記事項…遺物の特徴となる事項を記した。

＜写真図版＞

１０．挿図と写真図版の遺物番号は、それぞれの遺跡の実測図報告書番号と対応している。

１１．遺物の写真図版は、特に断らない限り縮尺不同である。

本　文　目　次

Ⅰ　前言 ……（奥野　実・大村伸一）……1
Ⅱ　位置と歴史的環境 ……（大村伸一）……4
Ⅲ　戸井口遺跡の調査成果 ……（大村伸一）……7
Ⅳ　スブクリ遺跡の調査成果 ……（小山憲一・新名　強）……27

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図 ……5

【戸井口遺跡】
第２図　遺跡地形図 ……8
第３図　調査区位置図 ……8
第４図　調査区平面図① ……9
第５図　調査区平面図② ……10
第６図　調査区土層断面図① ……12
第７図　調査区土層断面図② ……13
第８図　ＳＢ27遺構平面図 ……14
第９図　ＳＢ28遺構平面図 ……15
第10図　ＳＫ８遺構平面図 ……16
第11図　ＳＫ10・13、ＳＫ７、ＳＫ18・21・22遺構平面図 ……17
第12図　出土遺物実測図１ ……21
第13図　出土遺物実測図２ ……22

【スブクリ遺跡】
第14図　範囲確認調査坑配置図 ……27
第15図　調査区位置図 ……28
第16図　Ａ地区遺構平面図・土層断面図 ……29
第17図　Ｂ～Ｅ地区遺構平面図 ……30
第18図　Ｂ～Ｄ地区土層断面図 ……31
第19図　Ｅ地区土層断面図 ……32
第20図　Ｆ・Ｇ地区遺構平面図・土層断面図 ……33
第21図　出土遺物実測図 ……34

表　目　次

第１表　遺跡一覧 …… 5

【戸井口遺跡】

第２表　遺構一覧 ……11

第３表　出土遺物観察表 ……23

第４表　出土遺物観察表 ……24

【スブクリ遺跡】

第５表　出土遺物観察表 ……34

図　版　目　次

【戸井口遺跡】

図版１　調査区遠景・調査前風景

図版２　調査区全景（東から）・調査区全景（西から）

図版３　ＳＢ27・ＳＢ28

図版４　ＳＫ８遺物出土状況・ＳＫ10遺物出土状況

図版５　出土遺物１

図版６　出土遺物２

【スブクリ遺跡】

図版７　Ａ地区調査前風景（東から）・Ａ地区全景（北東から）

図版８　Ｂ～Ｅ地区遠景（南西から）・Ｆ・Ｇ地区遠景（北西から）

図版９　Ｂ地区全景（東から）・Ｃ地区全景（西から）

図版10　Ｅ地区全景（東から）・Ｆ地区全景（南から）

図版11　スブクリ遺跡（２次）・広瀬中田遺跡出土遺物

Ⅰ　前　言

1　調査の契機

戸井口遺跡とスブクリ遺跡は、三重県松阪市広瀬町に所在する、新規発見の遺跡である。東方には櫛田川が流れ、西方に大明神山が存在する。また、北方には伊勢自動車道が通じ、南方には広瀬町の集落が広がっている

現況は水田・畑地・荒地などとなっている。

戸井口遺跡、スブクリ遺跡の第１次発掘調査（以降「戸井口遺跡」、「スブクリ遺跡（１次）」）は、平成15年度中山間事業（茅日広江地区）広瀬工区下茅原ほ場整備事業伊勢松阪線に伴い行われた。調査に先立ち平成14年３月と12月に範囲確認調査を行った。その結果、事業予定地について遺跡が存在する事が確認された。これを受けて、遺跡保存に向けて県農林水産商工部と埋蔵文化財保護の協議を重ねた。その結果、事業に伴い保存不可能な部分について調査を実施し、記録保存することとなった。

スブクリ遺跡の第２次発掘調査（以降「スブクリ遺跡（２次）」）は、平成16年度中山間地域総合整備事業（芽広江地区）に伴い行われた。

2　調査の経過と諸手続

（１）現地調査経過の概要

戸井口遺跡は、2,630㎡を対象面積とし、平成15年５月16日から11月25日にかけて行った。

スブクリ遺跡（１次）は407㎡を対象面積とし、平成15年８月18日から８月26日にかけて行った。

スブクリ遺跡（２次）は900㎡を対象面積とし、平成16年５月７日～５月19日にかけて行った。

現地調査にあたっては、地元在住の方々などに補助をしていただいた。記して感謝します。

【戸井口遺跡・スブクリ遺跡（１次）】

井上公隆、梅田節子、梅村侑、奥山多恵子、
加藤孝俊、鎌倉定子、鎌倉節子、鎌倉正、
倉田あゆみ、倉田拓真、佐野智子、関岡昌子、
高山藤郎、田中春己、谷口秋太、辻本澄子、
辻本正則、名古宏、西川明、西川峰代、新田幸、
野呂悌二、東出誠、深田和夫、細川俊之、南出晃、
向瀬博幸、村田ミヨ、山本勝郎、山中祐樹、
脇田よし子　　（五十音順、敬称略）

（２）　調査日誌（抄）

戸井口遺跡

平成15年（2003）

５月13日　入札

５月19日　現地協議

６月９日　監督員詰所に調査用具などを搬入する。

６月16日　表土掘削前の段階確認を行う。

６月23日　重機による表土掘削を開始する。掘削が終了した箇所から地区設定を行う。（Ｃ７区、Ｄ１～11区、Ｅ・Ｆ・Ｇ・Ｈ・Ｉの１～18区、Ｊ２・３区）

７月14日　職場安全巡視が実施される。

７月18日　表土掘削を終了する。土量が多く時間がかかった。表土掘削後の段階確認を行う。

７月22日　人力による掘削作業を開始する。

７月31日　ＳＺ１を検出する。

８月５日　写真撮影を行う。（Ｃ７区、Ｄ１～11区、Ｅ・Ｆ・Ｇ・Ｈ・Ｉの１～18区、Ｊ２・３区）

８月６日　重機による表土掘削を開始する。（A18～25区、B・C17～25区、D16～25区、Ｅ・Ｆ・Ｇ・H19～25区）

８月８日　台風10号の影響のため作業を中止する。

８月11日　表土掘削後の段階確認を行う。

８月18日　人力による掘削作業を再開する。

８月19日　多気郡教育研究会社会科部会の体験発掘

を行う。11名が参加する。

8月22日　H・Ｉの11～17区の遺構検出を行う。

8月27日　Ｅ～Ｉの16～18区の遺構検出を行う。Pitをたくさん検出する。

8月29日　H19・20区でＳＫ８を検出する。

9月１日　ＳＫ７やＳＫ８・ＳＫ10などの掘削を行う。ＳＫ８の周りには柱穴があり、土坑をもつ掘立柱建物の可能性が考えられる。

9月２日　ＳＫ８からは多数の土師器皿や天目茶椀などが出土する。

9月３日　ＳＫ10の遺物出土状況図の作成する。

9月５日　ＳＫ８の遺物出土状況図の作成を開始する。

9月８日　Ｄ～Ｈの22・23区の遺構検出を行う。検出面が一段低くなったため、検出される遺構数は少ない。

9月11日　ＳＫ８の遺物出土状況図が完成し、遺物を取り上げる。

9月12日　ＳＫ20・ＳＫ22などの掘削を行う。

9月17日　Ｃ・Ｄの23～25区の遺構検出を行う。

9月18日　ＳＤ24・Pitなどの掘削を行う。

9月19日　１～12区までの人力掘削後の段階確認が行われる。

9月26日　ＳＫ20の周りにもPitが確認されたため、土坑をもつ掘立柱建物がもう１棟存在する可能性も考えられる。

9月29日　Ｂ・Ｃの21～25区の遺構検出を実施する。

10月１日　Ｂ～Ｅの16・17区の遺構検出を実施する。ＳＺ１の続きが検出される。

10月６日　雨のため作業を中止し、現地説明会の準備を始める。

10月７日　写真撮影を開始する。（A18～25区、Ｂ・Ｃ17～25区、Ｄ16～25区、Ｅ・Ｆ・Ｇ・H19～25区）

10月８日　写真撮影が終了する。

10月９日　重機による表土掘削を開始する。（Ｂ26・27区、Ｃ・Ｄ・Ｅ・Ｆ・Ｇ26～34区）並行して、遺構実測を開始する。（A18～25区、Ｂ17～27区、Ｃ７・17～34区、Ｄ１～11・16～34区、Ｅ・Ｆ・Ｇ・１～34区、Ｈ１～25区、Ｉ１～18区、Ｊ２・３区）

10月10日　表土掘削が終了する。

10月17日　遺構実測が終了する。

10月20日　人力による掘削作業を再開する。

10月28日　多気中学校の生徒４名が職場体験学習のため調査に参加する。（10月30日まで）

11月４日　掘削作業が終了する。

11月７日　写真撮影を行う。（Ｂ26・27区、Ｃ・Ｄ・Ｅ・Ｆ・Ｇ26～34区）

11月10日　遺構実測を開始する。（Ｂ26・27区、Ｃ・Ｄ・Ｅ・Ｆ・Ｇ26～34区）

11月11日　最終の段階確認が行われる。

11月13日　午前、松阪市市政記者クラブで資料提供を行う。

11月14日　遺構実測が終了する。

11月16日　午後２時15分から現地説明会を開催する。40名の参加を得る。

11月17日　遺構の畔などの掘削を行う。

11月18日　現場の引渡しが行われる。調査用具などを搬出する。する。これを持って現場作業が終了する。

12月２日　完成検査が行われる。

スブクリ遺跡（１次）

平成15年（2003）

８月18日　重機による表土掘削を開始する。中近世の土師器や陶器の小片僅かに出土する。

８月20日　重機による表土掘削を終了する。

８月21日　調査区上段の北壁のトレンチを重機で掘削する。

８月22日　調査区は北壁のトレンチの土層断面を観察した結果、谷状地形に盛土した平坦地と判断した。

８月25日　写真撮影と平面実測を行う。

８月26日　北壁の土層断面図を作成する。これを持って現場作業を終了する。

スブクリ遺跡（２次）

平成16年（2004）

５月７日　Ｆ・Ｂ地区表土掘削。Ｆ地区遺構検出。

５月10日　Ｃ地区表土掘削。

５月11日　Ｆ地区遺構掘削。Ｄ・Ｅ地区表土掘削。Ｂ地区遺構検出、カクラン激しい。

５月12日　Ｆ地区写真撮影、平面・土層実測。Ｂ地区遺構掘削。

５月13日　Ｆ地区南壁土層断面。Ｂ地区遺構掘削、写真撮影、平面実測。Ｄ・Ｅ地区表土掘削。

５月17日　Ｃ地区遺構掘削。Ｄ・Ｅ地区検出、掘削。

５月18日　Ｇ地区表土掘削。

５月19日　Ｃ地区下層トレンチ掘削。土層実測。Ｄ・Ｅ地区土層実測。Ｇ地区写真撮影、平面・土層実測。現場作業終了。

（３）調査の方法

（Ａ）埋蔵文化財発掘調査業務

三重県埋蔵文化財センターが現地調査を実施するにあたり、発掘調査と関連作業を支援するために行われている。

調査担当が調査に専念でき、調査の能率化や安全管理の向上などを図る目的で、実施している。

この業務内容は、考古学的な調査・記録作業と、作業員の雇用・管理や機材の提供などの土工的作業や測量作業などとなっている。

発掘調査では後者の作業を、指名競争入札により戸井口遺跡・スブクリ遺跡（１次）は、株式会社中部日本鉱業研究所が落札し、委託した。スブクリ遺跡（２次）は、松阪農水商工部の現物供与で発掘調査を行った。

（Ｂ）調査区の設定

戸井口遺跡は、調査区内を４ｍ四方の桝目で区切ることによって小地区を設定した。北から南に１～34、西から東にＡ～Ｊを配置した。

スブクリ遺跡では、第１次・２次ともに遺構・遺物が僅少であったため、小地区は設定しなかった。

（Ｃ）遺構図面

調査区の全体の平面図は縮尺１／100（平板実測）と縮尺１／20で、各土層断面図は縮尺１／20で作成した。また、出土遺物を伴う遺構については、縮尺１／10で作成した。

（Ｄ）掘削方法

戸井口遺跡では、表土を重機で、包含層以下・遺構までを人力で行った。

（４）文化財保護法等にかかる諸通知

文化財保護法等にかかる諸通知は、以下の様に行っている。

（Ａ）戸井口遺跡

・法第58条の２第１項（県教育長宛）
　平成15年５月20日付教埋第48号

・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知（松阪警察署長宛）
　平成16年２月３日付教委12－９－４号（県教育長通知）

（Ｂ）スブクリ遺跡（１次）

・法第58条の２第１項（県教育長宛）
　平成15年５月20日付教埋第48号

・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知（松阪警察署長宛）
　平成16年２月３日付教委12－９－５号（県教育長通知）

（Ｃ）スブクリ遺跡（２次）

・法第58条の２第１項（県教育長宛）
　平成16年６月１日付教理第95号

・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知（松阪警察署長宛）
　平成17年３月30日付教委12－４－44号（県教育長通知）

（奥野　実・大村　伸一・新名　強）

Ⅱ　位置と歴史的環境

1　遺跡の位置

戸井口遺跡（1）スブクリ遺跡（2）は、三重県松阪市広瀬町字戸井口に所在する遺跡である。当調査地は、櫛田川中流域の左岸に位置している。大きく川が屈曲する北側の河岸段丘は、調査区の位置する標高約65m地点から広瀬集落が見渡せる見晴らしのいい景観である。調査区よりさらに北方は伊勢自動車が通じ、西方には大明神山が存在する。南方の櫛田川は松阪市と多気町の境界に位置する。

2　歴史的環境

当遺跡の所在地である松阪市広瀬町は、縄文時代より櫛田川の影響を絶えず受けてきた。櫛田川上流よりつながる、二上山からは讃岐石（サヌカイト）が運ばれており、井尻遺跡・宮ノ東遺跡などから出土[1]している。櫛田川は、上流部は中央構造線に沿って高見峠より流れ、当地を横断する形で、伊勢湾に流れ込む。櫛田川沿いの戸井口遺跡周辺の縄文遺跡では、大原堀遺跡[2]（3）、上ノ広遺跡[3]（4）、堀木遺跡[4]（5）、合道遺跡[5]（7）、王子広遺跡[6]（8）、大久保遺跡[7]（9）、奥ホリ遺跡[8]（10）、鎌岩遺跡[9]（11）、下村Ａ遺跡[10]（12）、中の平東遺跡[11]（13）、中の平西遺跡[12]（14）、新殿木戸遺跡[13]（15）、花の木遺跡[14]（16）と豊富である。櫛田川流域は、遠く旧石器時代から物資の流通・交通ルートであった。

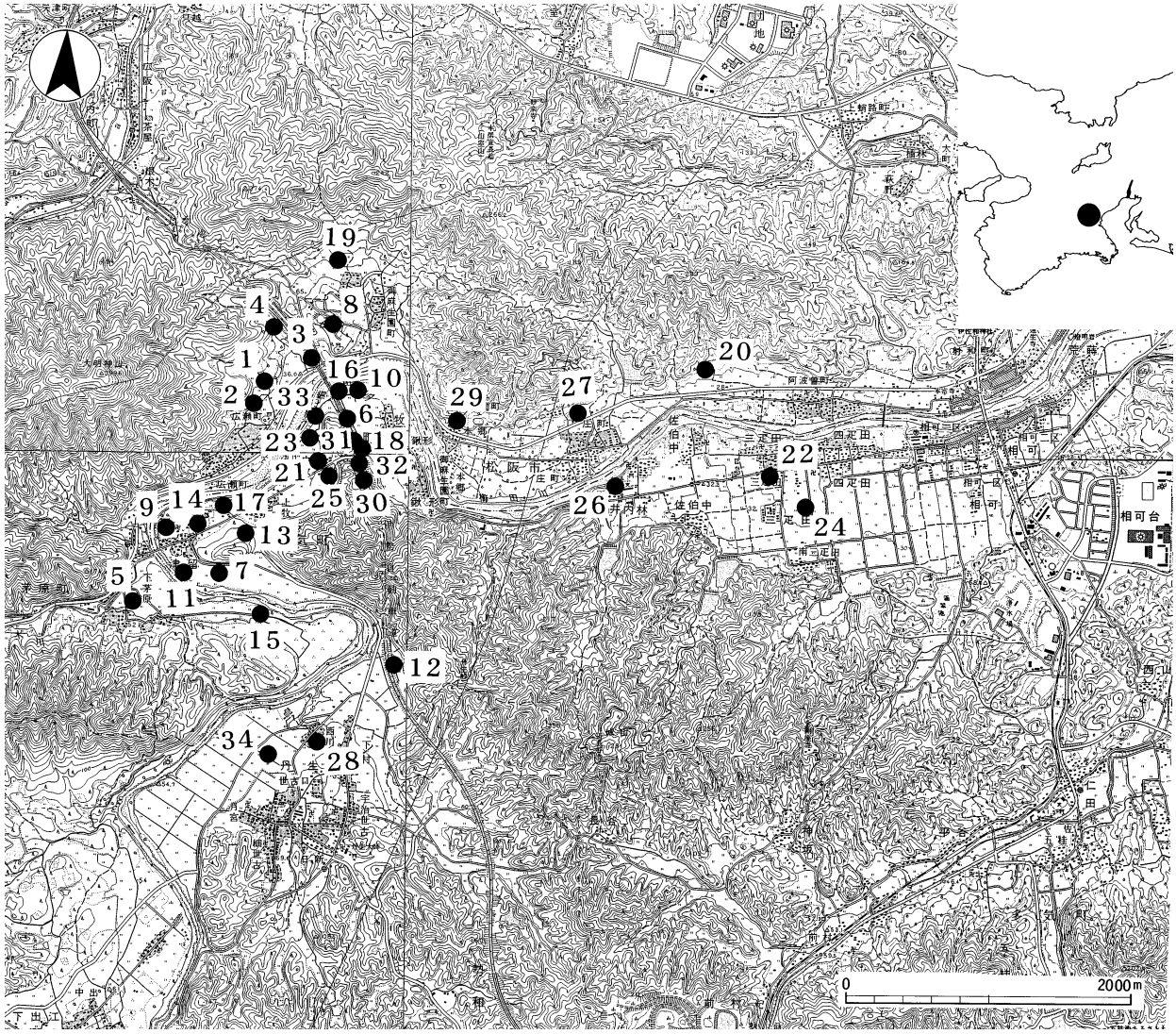
奈良県吉野から宇陀にかけては大和水銀の生産地であり、勢和村の丹生でも丹生水銀の生産地である。東大寺の大仏造営に伴って丹生水銀が用いられたのは周知のとおり[15]である。大原堀遺跡・上ノ広遺跡・王子広遺跡では「朱」の付着した土器が出土している。当地域も朱の生産や流通に何らかのかたちで関連していたことは疑いないものと思われる。

白鳳期の遺跡である牧瓦窯跡群[16]（18）からは、軒丸瓦や軒平瓦を御麻薗廃寺（19）・丹生寺廃寺に供給していた[17]ことが発掘調査から明らかになっており、周辺地域への瓦供給を担っていたと考えられている。櫛田川流域周辺は古代の飯高郡に比定[18]されており、豪族の飯高氏が丹生水銀生産地や寺院を掌握した。飯高氏は大和王権の中で水銀支配の経済力を背景に、氷高内親王の資養者としての権利等を持っていたと考えられている。『続日本記』によると、氷高内親王が元正天皇として即位すると、飯高諸高を采女として送りこみ元正、聖武、孝謙、光仁と４代の天皇に奉仕し、最終的に采女として前例のない「非参議従三位」という大臣待遇の扱いをうけた。中央との結びつきを強めた飯高氏は当地域の支配力も強め、当然そのような背景をもとに繁栄をきわめたものと考えられる。

しかし、直接飯高氏と関連づける発掘資料が少量のためこれからの発掘調査をまつところである。

『神鳳抄』には広瀬御薗という記載があり、現在の広瀬町に比定されている。その他にも芽原田御厨・御麻薗という地名からも中世には神宮領として成立していた。秋丸遺跡（20）、川ノ上遺跡（21）、三疋田遺跡（22）、堂ノ前遺跡（23）、東片田遺跡（24）、宮谷遺跡（25）、宮の木遺跡（26）、宮脇遺跡（27）、畝ノ上遺跡（28）、門坂遺跡（33）は主として中世の遺跡である。銭形中世墓群[19]（31）では、一族集団的な小さな連合体の墓から村（字）単位の墓への変化が見られる。墓地の形成・変換は、社会構造の変化の反映である。神宮の支配した体制が解体され、村（字）は寺や城に吸収されていった。伊勢国司北畠氏系の上山城遺跡[20]（29）、釈尊寺遺跡[21]（30）、牧城跡[22]（32）の存在が注目される。

近世に入り幕藩体制が確立されると、当地域は紀州和歌山藩松阪領として存在している。文禄検地帳に「飯高郡ノ内広瀬村」と記されている。古来より



第１図　遺跡位置図（１：50,000）　　（国土地理院　松阪・横野・大河地・国束山）

No	遺 跡 名	時 代	主な遺構	主な出土遺物
1	戸井口遺跡	江戸	掘立柱建物・土坑・溝等	土師器・焙烙・山茶椀・陶磁器・十能等
2	スブクリ遺跡	鎌倉・室町		土師器・陶器
3	大原堀遺跡	縄文・平安	掘立柱建物・土器棺墓・土坑墓等	石器・縄文土器・土師器・山茶椀・製塩土器等
4	上ノ広遺跡	先土器・縄文・平安	土坑・溝・土坑墓・柱穴	石鏃・トロトロ土器・縄文土器・土師器等
5	堀木遺跡	縄文		石器
6	浅間山北・南遺跡	弥生・鎌倉以降	土坑・柱穴	弥生土器・土師器・山茶椀・陶器等
7	合道遺跡	縄文・古墳以降		チャート・土師器
8	王子広遺跡	縄文		石器・縄文土器
9	大久保遺跡	縄文・古墳以降		石器・縄文土器・土師器・土錘
10	奥ホリ遺跡	縄文・鎌倉・室町	土坑・柱穴	石器・縄文土器・土師器・山茶椀等
11	鎌岩遺跡	縄文・古墳以降		石鏃・土師器片
12	下村Ａ遺跡	縄文以降	楕円形の焼土面	石鏃・縄文土器・石匙・土師器・山茶椀・陶器等
13	中の平東遺跡	縄文・古墳以降		石鏃・土師器片
14	中の平西遺跡	縄文・古墳以降		サヌカイト片・土師器
15	新殿木戸遺跡	縄文・鎌倉・室町		石器・縄文土器・山茶椀・山皿
16	花の木遺跡	縄文・弥生・鎌倉・室町	竪穴住居跡・方形周溝墓・土坑	切目石錘・縄文土器・弥生土器・土師器・山茶椀等
17	脇ノセコ遺跡	縄文・古墳以降		石鏃・土師器片
18	牧瓦窯跡群	白鳳	１号　平窯　　２～８号　登窯	丸瓦・平瓦・軒平瓦・軒丸瓦等
19	御麻薗廃寺	白鳳		軒丸瓦・軒平瓦・金銅仏
20	秋丸遺跡	鎌倉		土師器・山茶椀
21	川ノ上遺跡	鎌倉	柱穴	土師器・山茶椀
22	三疋田遺跡	鎌倉以降		土師器・山茶椀
23	堂ノ前遺跡	鎌倉		土師器
24	東片田遺跡	飛鳥・奈良・鎌倉	柵列	土師器
25	宮谷遺跡	鎌倉		土師器・山茶椀
26	宮ノ木遺跡	鎌倉		土師器・山茶椀
27	宮脇遺跡	鎌倉・室町		土師器
28	畝ノ上遺跡	平安・鎌倉・室町以降	掘立柱建物・土坑	土師器・山茶椀等
29	上山城跡	室町	土塁	
30	釈尊寺遺跡	室町	掘立柱建物・土坑・柵列・石列・配石等	土師器・陶器・磁器・瓦等
31	銭形中世墓群	室町	石組の墓１３基	石製五輪塔
32	牧城跡	室町	山頂に平坦地	
33	門坂遺跡	奈良・平安・鎌倉・室町	石組土坑・掘立柱建物・溝	土師器・山茶椀・陶器等
34	若宮遺跡	室町以降	土坑	土師器・貨幣・十能等

第１表　遺跡一覧

大和から伊勢神宮への参宮街道は初瀬（伊勢）街道としてにぎわっていた。和歌山と松阪を結ぶ道が紀州街道として熊野街道とともに整備されている。相可は宿場町として栄え、津留は渡し場が存在したことから同じく宿場町として賑わった。広瀬村は津留や相可といったにぎやかな宿場町にはさまれた、ひと時の静寂地として栄えた。

（大村　伸一）

[註、参考文献]

① 奥　善次「縄文時代の勢和村」『勢和村史　通史』（平成11年８月31日）

縄文草創期の県内の出土石器の材質としては在地のチャートが優勢であり、サヌカイトは尖頭器等にやや限定されてくるのだが、後期になると石鏃を主として在地のチャート利用が後退し二上山産のサヌカイト利用が一般的になる傾向を示す。通常は身近な石材を調達して石器製作を行うことを考えると、サヌカイトの輸送にかかわるような集団が存在したのではないかと憶測される。

② 奥　善次「松阪市の遺跡　芽広江地区」『松阪市史第二巻　史料編　考古』（1978年10月31日）

③ 河北秀美ほか『近畿自動車道　（久居～勢和）　埋蔵文化財発掘調査報告　－第一分冊１－』（三重県教育委員会、1989年）

④ ②に同じ。

⑤ 三重県埋蔵文化財包蔵地調査カードより

⑥ ②に同じ。

⑦ 奥　善次「縄文時代」『多気町史　通史』（平成４年３月31日）

⑧ 松葉和也・柴山圭子　『奥ホリ遺跡発掘調査報告書』（三重県埋蔵文化財センター、1999年）

⑨ ⑤に同じ。

⑩ ③と同じ。

⑪ ⑤に同じ。

⑫ ⑤に同じ。

⑬ ②に同じ。

⑭ 清水正明『三重県埋蔵文化財調査報告』（1998年）

⑮ 奥　善次「古代の勢和」『勢和村史　通史』（平成11年８月31日）

『東大寺要禄』によると大仏を鋳造するのに熟銅73万9560斤の水銀が使われたとある。最初の東大寺大仏の建立に際して使用された水銀がどこから進上されたものかという明確な記載はないが、東大寺大仏の再建の際、伊勢国住人大中臣某の「旧宅」から産出したという水銀２万両が後白河上皇に献上され、その内１万両が使われたという『東大寺続要録』の記載や、東大寺大仏建立以前から伊勢国より中央へ朱砂と雄黄の献上をしているという「続日本紀」の記載等、時代は下るが『延喜式』の規定による限り、中央諸官司で消費される水銀は、毎年伊勢国より進上されていた水銀400斤で全て賄われていたこと等から明らかである。

⑯ 『近畿道　埋蔵文化財発掘調査報告　第１分冊２』（1989年）

⑰ 各瓦窯の年代間は第Ⅰ期の２・３号窯を８世紀初頭、第Ⅱ期の４・５・６・７・８号窯を８世紀の前半、第Ⅲ期の１号窯を８世紀中葉と考えられている。４・８号窯出土の軒平瓦は丹生寺廃寺から同笵瓦が出土しているが、御麻薗廃寺と丹生寺廃寺からは、牧瓦窯以外からの供給も受けており、すべてを牧瓦窯で補ったわけではない。

⑱ 『近長谷寺資材帳』によると平安時代初期に当寺に飯高氏が寄進した領地に、「櫛田川」という名称が記載されている。櫛田川周辺に勢力が及んでいた。

⑲ 野原宏司ほか　『近畿自動車道　（久居～勢和）埋蔵文化財発掘調査報告　第一分冊２』（三重県教育委員会、1989年）

⑳ 『三重の中世城館』（1976年　三重県教育委員会）

㉑ ③に同じ。

㉒ ⑲に同じ。

Ⅲ　戸井口遺跡

1　基本層序

基本層序は、上から第１層：褐灰粘質土（10YR5/1）〔表土・耕作土〕、第２層：〔床土〕、第３層：褐灰色砂質土（10YR6/1）〔旧耕作土〕、第４層：にぶい黄褐色粘質土（10YR5/4）〔置土〕、第５層：灰黄褐色粘質土（10YR4/2）〔包含層〕、第６層：にぶい黄褐色砂質土に～70㎝の礫混じり（10YR5/4）〔地山〕となる。遺物包含層は第５層で、遺構検出面は第６層上面である。（第６・７図参照）

2　遺構

調査で確認された遺構は、江戸時代のものである。

以下、主な遺構について概述する。遺構の深さは全て検出面からの数値である。

なお、記述されていない遺構については、遺構一覧表（第２表）を参照されたい。

（１）土坑を伴う掘立柱建物

ＳＢ27（第８図）　調査区北方よりのほぼ中央部にある桁行３間×梁行２間で、北東隅に土坑（ＳＫ８）を伴う掘立柱建物である。棟方向はＮ30°Ｗをとる南北棟である。南東隅が撹乱のため柱穴が不明で、遺構北側の調査区外にも未検出の柱穴が存在した可能性もあり、建物の規模が拡大する可能性もある。柱掘形は円形で、径約0.4～1.3m、深さ約0.2～1.3mである。

建物の規模は、桁行10.3m・梁行6.7mで、柱間寸法は南から3.4m＋3.5m＋3.4m、梁間が西から3.8m＋2.9mである。いずれも不等間である。

掘形埋土から土師器甕の小片や土師器片などが出土した。出土遺物が小片のため時期の決定は難しいが、土坑（ＳＫ８）からは多量の遺物が出土しており、瀬戸・美濃産の陶器編年[①]より江戸時代前期の遺構と推定される。

ＳＢ28（第９図）　ＳＢ27より東に一段下がった調査区北方部で検出した。３間×１間分しか検出できなかったが、北側が調査区外に延びる桁行２間以上×梁行３間の掘立柱建物である。ＳＢ27とは異なり南中央に土坑（ＳＫ20）を持つ。棟方向はＮ60°Ｗをとる、南北棟である。柱掘形は円形で、径0.3～0.7m、深さ約0.1～0.5mである。建物の規模は、桁行3.４m×梁行6.4mである。

柱間寸法は桁間が3.4mである。梁間が西から1.7m＋2.7m＋2.0mと不揃いである。遺構が調査区北の農道で切られているが、建物北側の調査区外にも未検出の柱穴が存在すると推定できることから、建物の規模は拡大する可能性が十分にある。

掘形埋土から土師器甕の小片や土師器片などが主に出土した。ＳＢ27と比べ、出土遺物が少量・小片のため時期の決定は難しいが、瀬戸・美濃産の陶器片より江戸時代前期の遺構と推定される。

（２）溝

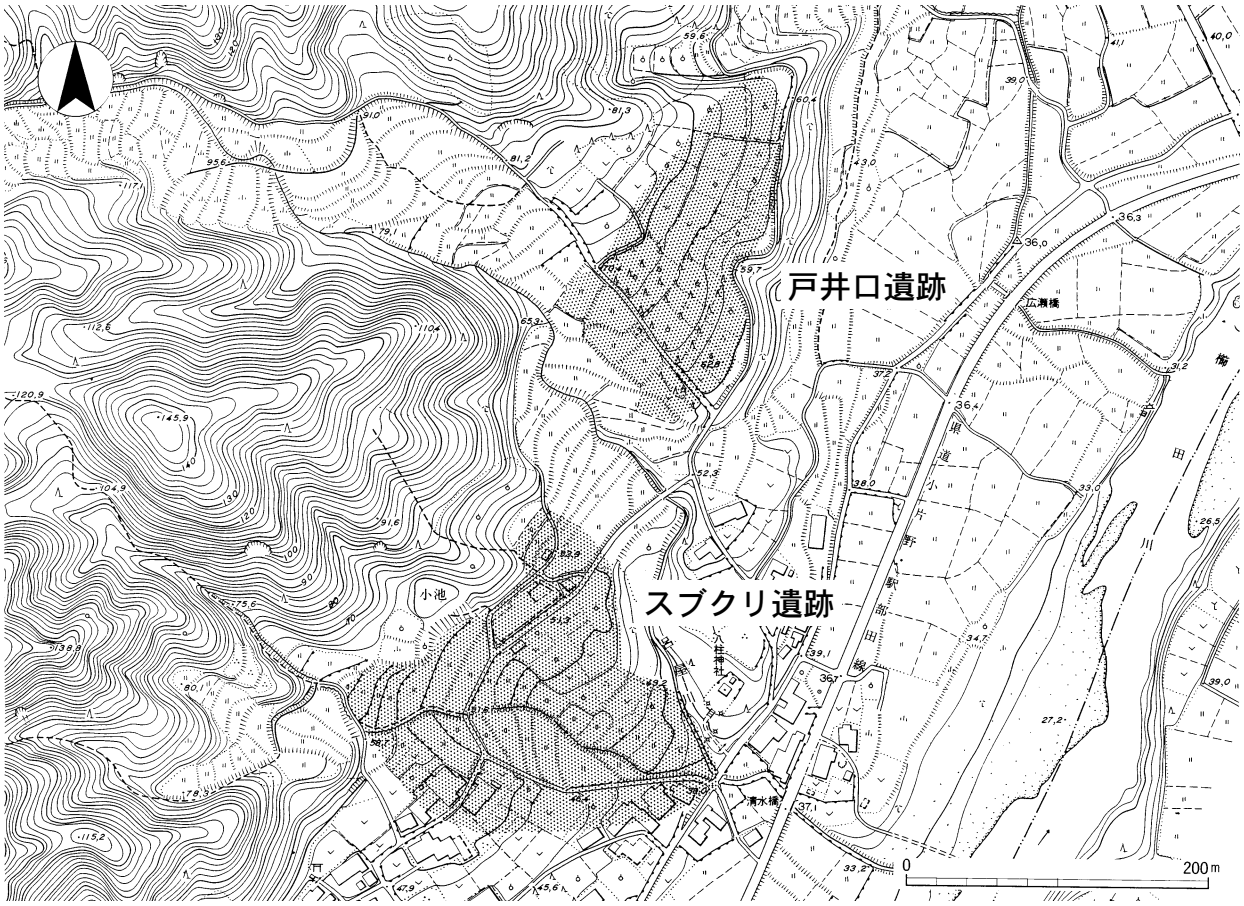
ＳＤ24　調査区中央部の南端で検出した。規模は長さ15m以上・幅0.3m・深さ約0.2mで、東南側は削平を受けている。

埋土は２層に分けられる。上から灰黄褐色粘質土（10YR4/2）に黄褐色砂質土（10YR5/6）が混じるである。土師器皿・土師器片・山茶椀片が出土した。

（３）土坑

ＳＫ７（第11図）　調査区中央部の北端で検出した。方形を呈し、規模は長さ2.1m・幅1.6m以上・深さ約0.4mである。大窯４の折縁皿・丸皿が出土した。時期は江戸時代前半と考えられる。

ＳＫ８（第10図）　調査区中央部の北端で検出した方形の土坑で、ＳＢ27に伴う土坑であると考えられる。長さ4.2m・幅3.2m以上・深さ約0.3mで、北側は調査区外へ延びる可能性もある。埋土は２層に分けられ、上から灰黄褐色粘質土（10YR4/2）・灰



第２図　遺跡地形図（１：5,000）

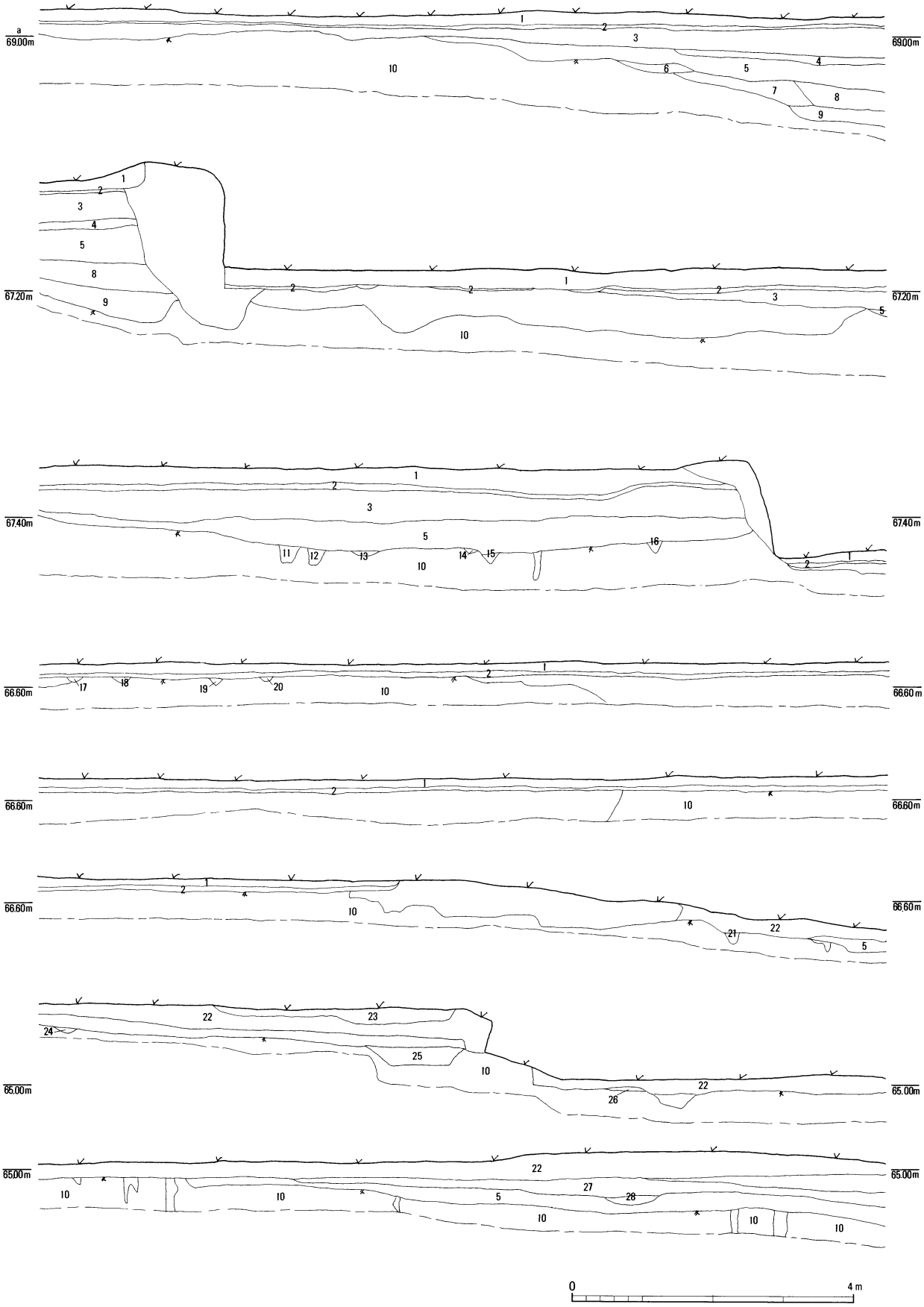
第３図　調査区位置図（１：2,000）　〔■　試掘杭〕

第４図　調査区平面図①（１：300）

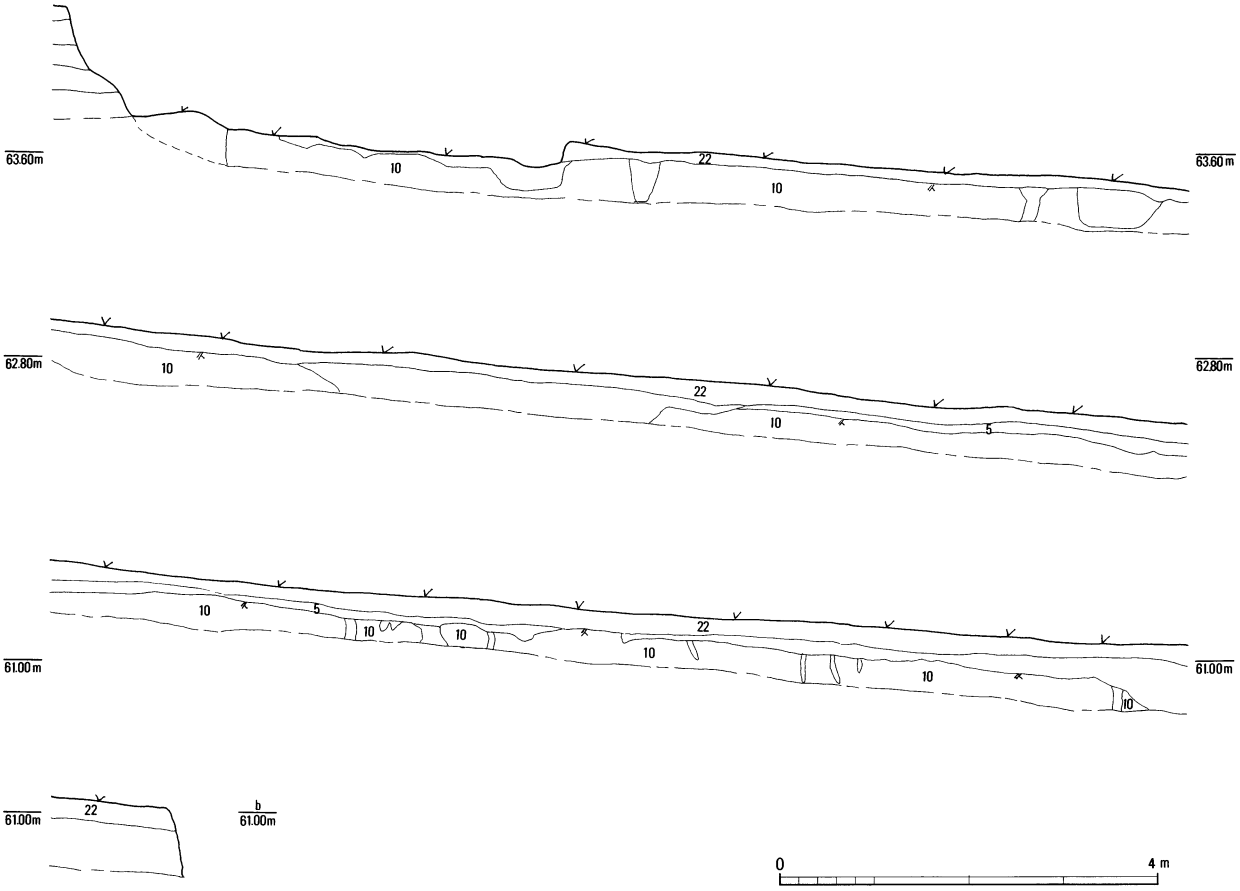
第５図　調査区平面図②（１：300）

遺構番号	位置	性格	規模(m)	時期	出土遺物	備考
SZ1	A18, B17・18, C7・17・18, D1～3・6～11・16・17, E1～17, F1～17, G1～15, H1～12, I2～6, J2	落ち込み	幅20以上、深さ0.3～0.6	江戸時代以降	土師器皿片、土師器鍋片、土師器片など	西方と南方は調査区外に続く
SD2	G15・16, F16・17	溝	幅0.6、深さ0.1	中世 鎌倉・室町	土師器片、土師甕片、山茶椀片など	SZ1より古い
SK3(旧SD3)	G18	土坑	幅0.8、深さ0.2	古墳後期～平安？	土師器甕片	切り合いあり
SK4	G15・16	土坑	長径0.7、短径0.5、深さ0.6	？	土師器細片	
SK5	G15	欠番				(攪乱)
SD6	F17・18	溝	幅0.6、深さ0.2	？	土師器細片	SZ1より古い
SK7	G20	土坑	長径2.1、短径1.6、深さ0.4	江戸時代前期	土師器片、土師皿片、焙烙片、陶器片	
SK8	H19・20	土坑	長径4.2、短径3.2以上、深さ0.3	江戸時代前期	土師器皿、焙烙、天目茶碗、鉄製品、擂鉢、陶器皿、十能?など	多数の土器や陶器がまとまって出土
SK9	E19, F19	土坑	長径1.8、短径0.8、深さ0.2	江戸時代前期	土師器細片、磁器片など	
SK10	G19	土坑	長径0.7、短径0.6、深さ0.6	江戸時代前期	土師皿、陶器皿、天目茶碗など	
SD11	H19	溝	幅0.7、深さ0.1	江戸時代前期	土師器細片	SK8より古い
SK12	F19	土坑	長径1.3、短径1.2、深さ0.1	江戸時代前期	陶器片	切り合いあり
SK13	G19	土坑	長径1.2、短径1.1、深さ0.4	江戸時代前期	土師器片	
SK14	G19	土坑	長径1.4、短径0.7、深さ0.3	江戸時代前期	土師器皿、土師器片	SK17より新しい
SK15	F22	土坑	長径1.0以上、短径0.8、深さ0.1	江戸時代前期？	土師器細片？	攪乱より古い
SK16	F22・23, G22・23	土坑	長径2.3、短径2.1、深さ0.5	？	土師器細片	
SK17	G19	土坑	長径1.2以上、短径1.1、深さ0.3	江戸時代前期	土師器片	SK14より古い
SK18	G23・24, H23・24	土坑	径0.9、深さ0.2	江戸時代前期	土師器片	SK21より新しい
SK19	F23	土坑	長径0.9、短径0.7、深さ0.2	？	サヌカイト剥片	切り合いあり
SK20	F24・25, G24・25	土坑	径2.5、深さ0.3	江戸時代前期	土師器片、陶器片、鉄製品など	
SK21	G23, H23	土坑	長径1.5以上、短径1.3、深さ0.2	江戸時代前期	土師器皿、磁器片など	SK22より新しい
SK22	G23	土坑	長径2.1、短径1.5以上、深さ0.1	江戸時代前期	土師器片	SK21より古い
SK23	F23	土坑	長径1.3、短径0.6、深さ0.2	古代？	土師器片	
SD24	C22・23・24・25	溝	幅0.3、深さ0.2	中世 鎌倉・室町？	土師器片、土師器皿など	攪乱より古い
SK25	E25	土坑	長径1.7、短径1.0、深さ0.3	縄文？	縄文土器細片？	
SK26	D25	欠番				攪乱より古い
SB27		掘立柱建物	桁行10.3×梁行6.7	江戸時代前期		北東隅にSK8をもつ 規模は北側が調査区外のため桁行3間分のみ
SB28		掘立柱建物	桁行3.4×梁行6.4	江戸時代前期		南中央にSK20をもつ 規模は北側が調査区外のため桁行1間分のみ
SK29	E33	欠番				
SD30	C31・32	溝	幅0.4、深さ0.2	江戸時代前期	土師器細片	攪乱より古い。SD24と同一遺構の可能性あり。

第２表　遺構一覧

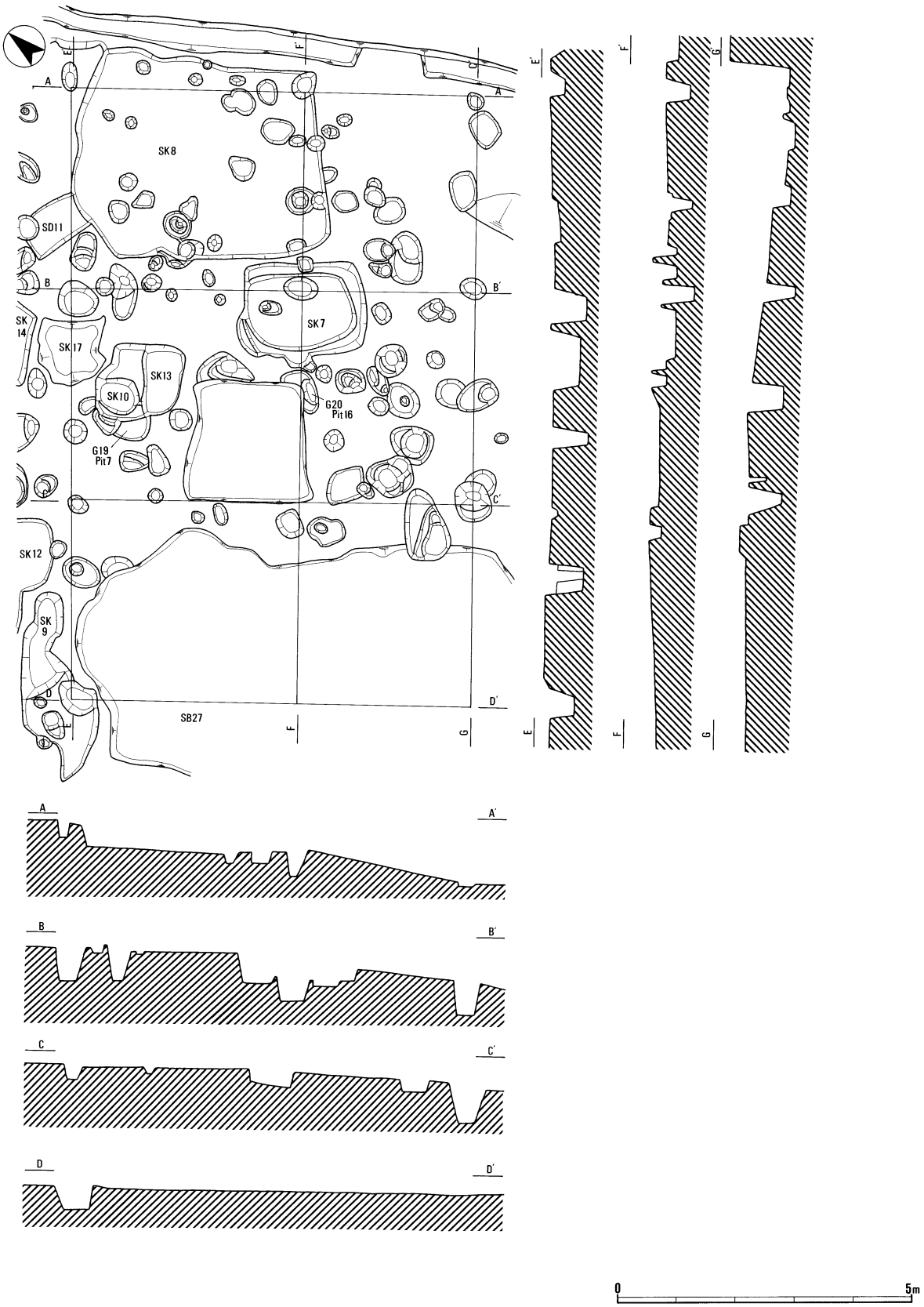


第６図　調査区土層断面図①（１：80）

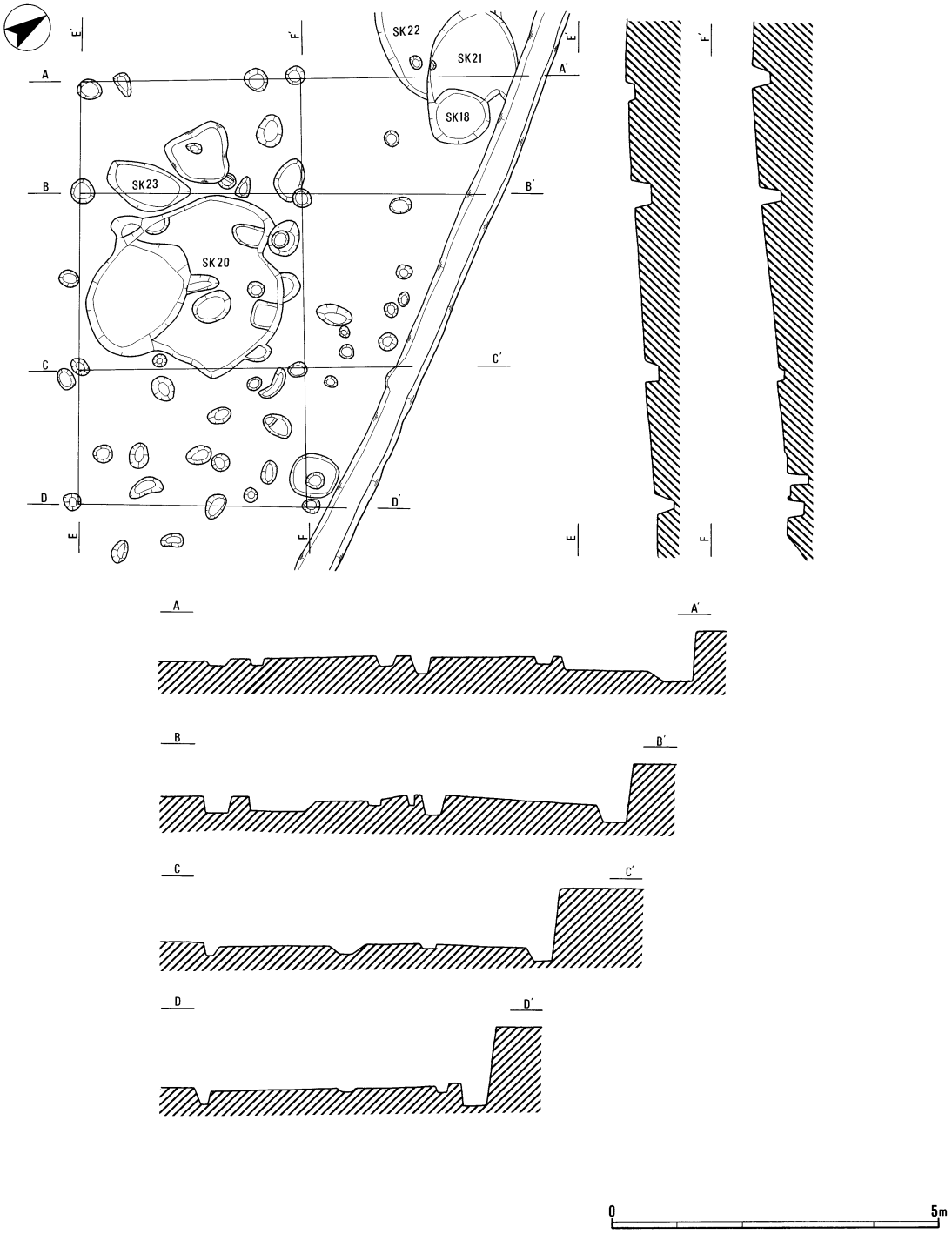


1 耕作土(10YR 5／1 褐灰粘質土)
2 床土
3 旧耕作土(10YR 6／1 褐灰粘質土)
4 置土(10YR 5／4 にぶい黄褐色粘質土)
5 包含層(10YR 4／2 灰黄褐色粘質土)
6 SZ1埋土(10YR 3／3 暗褐色粘質土)
7 SZ1埋土(10YR 4／4 褐色粘質土)
8 SZ1埋土(10YR 3／1 黒褐色粘質土)
9 SZ1埋土(7.5YR 5／3 にぶい褐色粘質土)
10 地山(10YR 5／4 にぶい黄褐色粘質土に～70cmの礫混じる)
11 Pit埋土(10YR 4／1 褐灰粘質土)
12 Pit埋土(10YR 5／1 褐灰粘質土に10YR 5／4 にぶい黄褐色粘質土混じる)
13 Pit埋土(10YR 4／2 灰黄褐色粘質土)
14 Pit埋土(10YR 3／3 暗褐色粘質土に10YR 5／4 にぶい黄褐色粘質土混じる)
15 Pit埋土(10YR 3／3 暗褐色粘質土に10YR 5／4 にぶい黄褐色粘質土混じる)
16 Pit埋土(10YR 4／4 褐色粘質土)
17 Pit埋土(10YR 4／1 褐灰色粘質土)
18 Pit埋土(10YR 3／3 暗褐色粘質土)
19 Pit埋土(10YR 3／2 黒褐色粘質土に10YR 5／4 にぶい黄褐色粘質土混じる)
20 Pit埋土(10YR 4／2 灰黄褐色粘質土に10YR 5／4 にぶい黄褐色粘質土混じる)
21 Pit埋土(10YR 3／1 黒褐色粘質土に10YR 5／4 にぶい黄褐色粘質土混じる)
22 表土(10YR 4／1 褐灰色粘質土)
23 置土(10YR 3／2 黒褐色土)
24 Pit埋土(10YR 2／2 黒褐色粘質土)
25 SD埋土(10YR 4／2 灰黄褐色粘質土に10YR3／4 にぶい黄褐色粘質土混じる)
26 Pit埋土(10YR 2／2 黒褐色粘質土)
27 旧耕作土(10YR 4／4 褐色粘質土)
28 遺構埋土(10YR 4／4 褐色粘質土に10YR 5／4 にぶい黄褐色粘質土混じる)

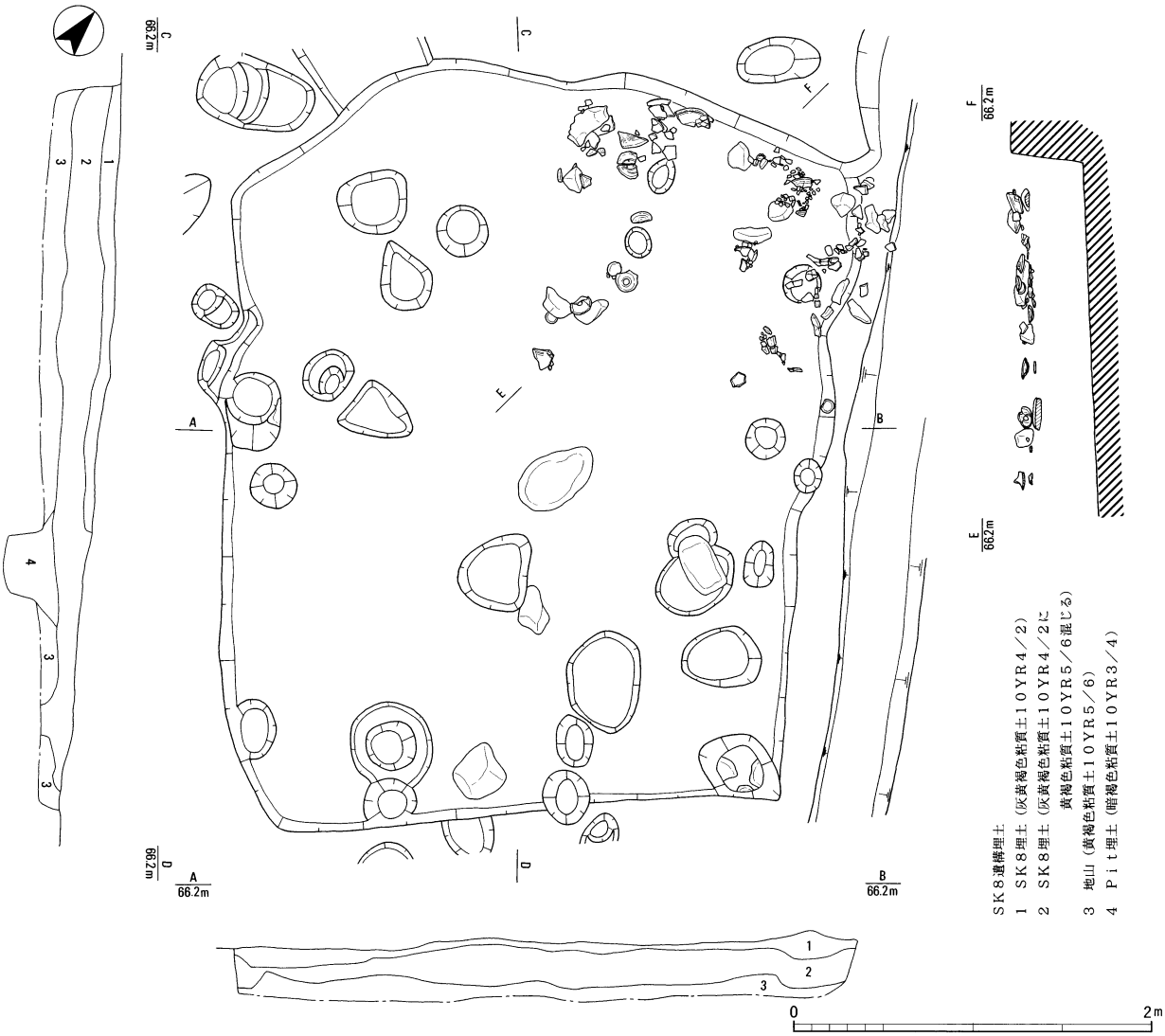
第７図　調査区土層断面図②（１：80）



第８図　ＳＢ27 遺構平面図（１：100）



第９図　ＳＢ28 遺構平面図（１：100）



第10図　ＳＫ８ 遺構平面図（１：40）

黄褐色粘質土（10YR4/2）に黄褐色粘質土（10YR 5/6）混じりである。

土坑内の北西部に遺物は集中し、土師器皿・焙烙・天目茶椀・擂鉢・陶器皿・十能・鉄製品が出土した。当遺跡の調査した全遺構の中で一番遺物量が多く、江戸時代前期と考えられる。

ＳＫ10（第11図）　調査区中央部の北端で検出した。楕円形を呈し、規模は長さ0.6m・幅0.6m・深さ約0.6mである。瀬戸産の鉄絵皿・美濃産の５小期の折縁皿などが出土した。時期は江戸時代前半と考えられる。

ＳＫ13（第11図）　調査区中央部の北端で検出した。方形を呈し、規模は長さ1.2m・幅1.1m以上・深さ約0.4mである。少量の土師器片が出土した。時期は江戸時代前期と考えられる。

また、ＳＫ７・10と同じく建物内土坑であると考えることもできるが当調査では含めなかった。

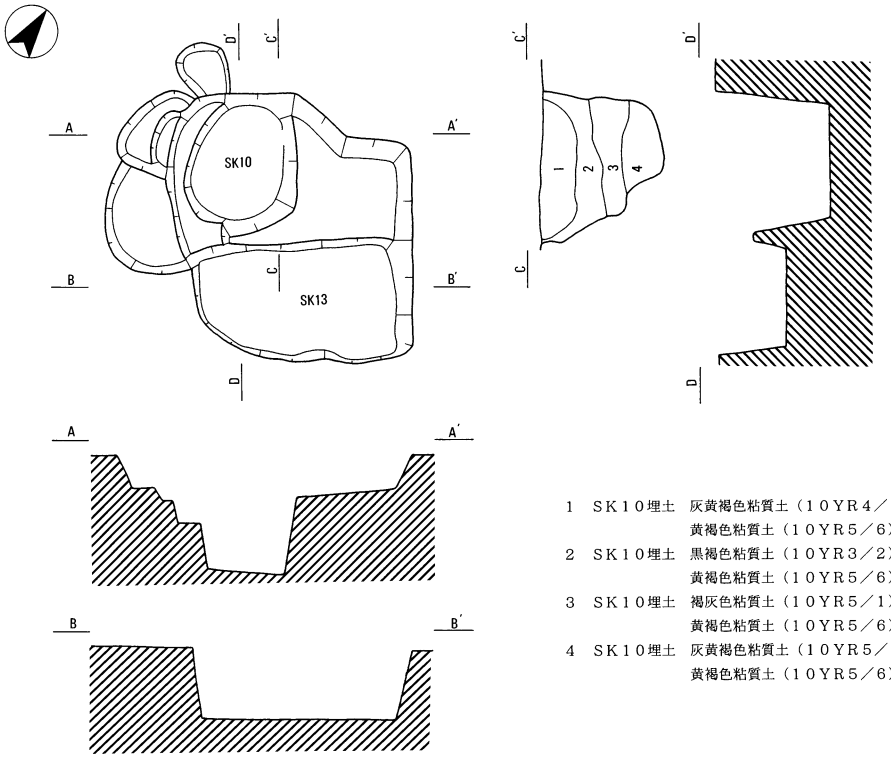
ＳＫ21（第11図）　調査区中央部の北端で検出した。楕円形を呈し、規模は長さ1.5m以上・幅1.3m・深さ約0.2mで、北側は調査区外へ延びる。少量の土師器片・磁器片などが出土した。ＳＫ22より新しく、時期は江戸時代前期と考えられる。

ＳＫ22（第11図）　調査区中央部の北端で検出した。楕円形を呈し、規模は長さ2.1m以上・幅1.5m・深さ約0.1mである。土師器片が出土した。ＳＫ21より古く、時期は江戸時代前半と考えられる。

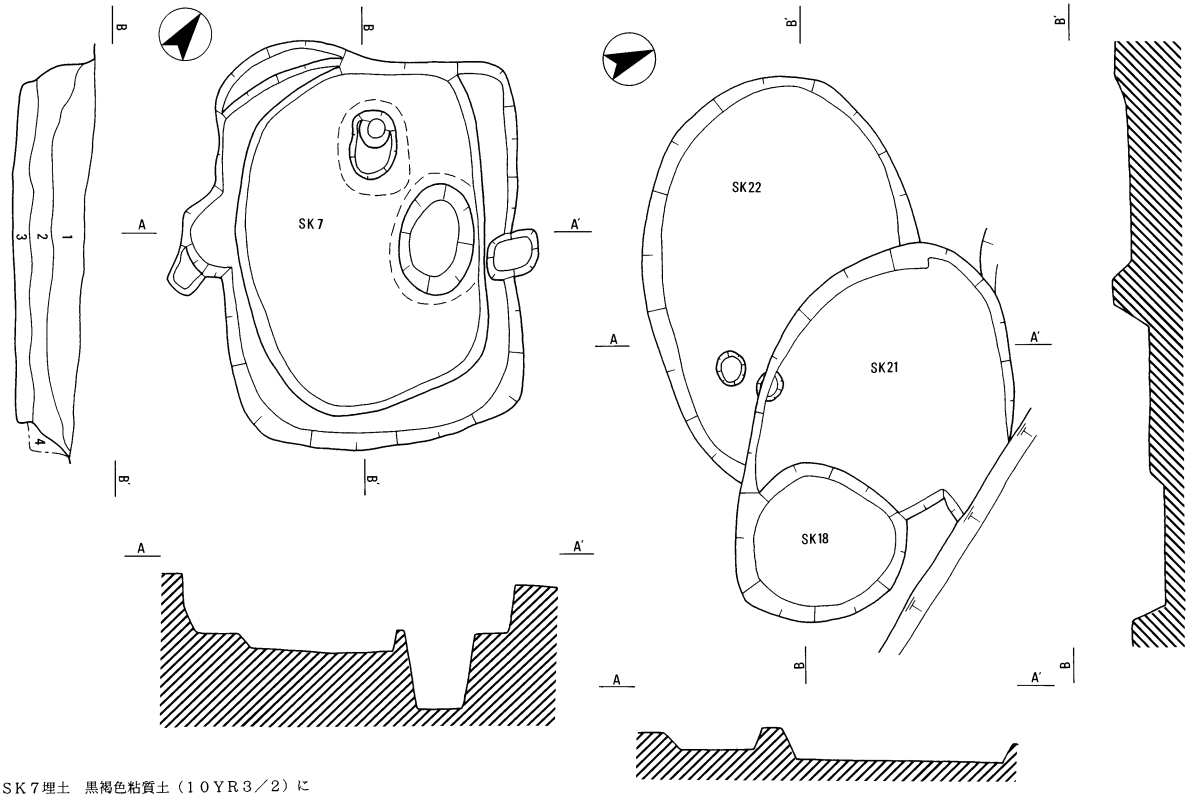
（大村　伸一）

［註］

① 以下、瀬戸・美濃大窯製品等の陶器類については、藤澤良祐氏にご教授をいただいた。



1　ＳＫ１０埋土　灰黄褐色粘質土（１０ＹＲ４／２）に
　　黄褐色粘質土（１０ＹＲ５／６）混じる。
2　ＳＫ１０埋土　黒褐色粘質土（１０ＹＲ３／２）に
　　黄褐色粘質土（１０ＹＲ５／６）混じる。
3　ＳＫ１０埋土　褐灰色粘質土（１０ＹＲ５／１）に
　　黄褐色粘質土（１０ＹＲ５／６）混じる。
4　ＳＫ１０埋土　灰黄褐色粘質土（１０ＹＲ５／２）に
　　黄褐色粘質土（１０ＹＲ５／６）混じる。



1　ＳＫ７埋土　黒褐色粘質土（１０ＹＲ３／２）に
　　黄褐色粘質土（１０ＹＲ５／６）混じる。
2　ＳＫ７埋土　灰黄褐色粘質土（１０ＹＲ４／２）に
　　黄褐色粘質土（１０ＹＲ５／６）混じる。
3　ＳＫ７埋土　暗褐色粘質土（１０ＹＲ３／３）に
　　黄褐色粘質土（１０ＹＲ５／６）混じる。
4　地山　黄褐色粘質土（１０ＹＲ５／６）

0　2m

第11図　ＳＫ10・13、ＳＫ７、ＳＫ18・21・22 遺構平面図（１：40）

3　遺　物

今回の調査で出土した遺物のうち、ＳＺ１出土のものは、調査区西端の斜面から混入した遺物と考えられる。縄文土器・弥生土器等が範囲確認調査を始め、表土採集・ＳＺ１の落ち込みに見られたことから、当調査区の西・北西部には縄文～弥生時代の遺構が存在していたとも思われるが、当調査では江戸時代の遺構しか確認できなかった。ＳＫ８を中心としたこれらの遺物は、江戸時代前半のものが大半を占めている。以下に特徴的な遺物について概略を述べる。

個々の遺物の詳細については、出土遺物観察表を参照されたい。

（１）江戸時代の遺物

ここでの陶器類の時期は、藤澤良祐氏による瀬戸・大窯製品編年・擂鉢編年・本業焼編年の時期区分をとった。また、土師器類の時期は、伊藤偉裕氏による南伊勢系土師器編年をとった。

ＳＢ27出土遺物

ＳＢ27の柱穴（Ｆ19pit１、Ｇ19pit６、Ｈ20pit５、Ｆ21pit２）からは、土師器片が出土している。土師器片は細片で時期判定不明であるが、Ｇ20pit６からは、美濃３・４小期の天目小椀（１）が出土しており、Ｇ19pit７出土の小柄（２）が元禄期のものであること、ＳＫ８の出土遺物の内容から、土師器細片もほぼ同時期のものと推定する。

ＳＢ28出土遺物

柱穴からは、遺物は全く出土しなかった。ＳＢ28内のＳＫ20からは近世の煙管の雁首・吸口と思われるキャップ状の鉄製品（63）が出土している。ＳＫ20に拠るところが大きい。

ＳＤ24出土遺物

出土遺物がほとんどなく、唯一出土した土師器皿（３）は、南伊勢系土師器のＢ系統ⅡＢ期のものである。遺構からの中世遺物としてはこの小皿片ぐらいである。ただ、ＳＺ１・包含層等に同時期の中世遺物があり、地形的にＳＤ24に向かって傾斜していることから、ＳＤ24に紛れ込んだ可能性が十分にある。このことからＳＤ24が中世の溝であるという性格・時期決定まではいかなかった。

ＳＫ７出土遺物（４～11）

台付小椀（４）は底部である。高台が貼り付けてあり、16世紀初頭以降のものである。土師器皿の破片（５・６）が出土しているが、いずれも小片で残りが良くない。（７～９）は折縁皿である。（７）は削り出し高台である。（８）は貼り付け高台である。いずれも大窯４前半のもので、底部に重焼痕が見られる。（９）は大窯４後半のものである。

（10・11）は南伊勢系土師器の鍋である。

ＳＫ８出土遺物（12～60）

（12）～（16）は天目茶椀である。

（12）～（14）は瀬戸６小期である。（15）は大窯３のものである。（16）は瀬戸・美濃３小期のものである。（17）～（20）は鉢である。（17）、（18）は共に砂粒を多く含み胎土はやや粗く、外面底部が三方貼り付け台になっており、内面胴部に押引状の刻みがある。（19）は内面に工具によるナデがあり、（20）は内面にハケメが施されている。

（21）、（22）は美濃５・６小期の小椀で、（22）は内面底部に重ね焼痕がある。

（23）は鉢である。瀬戸３・４小期のもので、内面上部に波形に櫛目状沈線４本が確認できる。鉄釉が付着している。一見して擂鉢のようである。瀬戸の窯跡でもあまり出土していないものである。

（24）は擂鉢である。全体に錆釉が施してあり、瀬戸５小期のものである。櫛目が12本確認でき、下から上へ掻かれている。（25）は口縁小片であるが、技法より大窯４後半のものと確認できた。

（26）は小片で錆びのため不明な点が多いが、先端部である。木盾があり、Ｇ19pit７の出土の小柄と同一固体の可能性がある。

台付椀（27）は底部片であり、あまり見ないものである。16世紀初頭以降のものである。

鍋（28～32）は南伊勢型のものである。いずれも第４段階からのものであるが、（28～30）は口縁部

が短く、半球形の体部をなすものと思われる。（31・32）は口縁部が短く外反し、最大径が上方へくるのが特徴的である。

焙烙（33～36）は南伊勢型のものである。外面にハケメがなく技法的に消滅している第５段階からのものである。いずれも器壁が薄く口径には精細を欠く。（35・36）は小型のものである。（36）には内面にハケメ技法が見られる。

（37）は南伊勢型の茶釜である。

（38）は砥石である。全面に使用痕がありツルツルしている。かなり使い込まれており、一部に焼け跡がある。

磁器（39）は小椀の口縁部片である。光沢があり、内外面ともにすべすべしており、絵付けが施されている。中国産の舶来品である。

十能？（40・41）は南伊勢系土師器のものである。（40）と（41）は別個体である。

（41）は十能？の先端部である。先端部だけを見ると、鉢等の口縁に見間違いそうである。口縁部を内面に極端に折り曲げてあり、先端に向かうほど口縁内面への折れはゆるやかになる。先端部は折れていない。先で物をすくい取るのにひっかかりをなくしている。

（40）は先端部が欠けているが、その他の部分に関しては完存している。先端が真っ直ぐになる「ちりとり」型ではなく、（40）と（41）を合わせて見るかぎり、先端が丸くなっている「うちわ」型である。近隣の出土例としては、若宮遺跡（勢和村）のＡ地区Ｂ８土坑ＳＤ３（北）より出土の土師器「十能」と形は非常に似ている。（40）の外面には、若宮遺跡のものにあるハケメは見受けられず、ハケメ技法の消滅が確認できる。柄部分は中空で異物挿入痕は確認できない。柄部分内外中面に煤の付着が目立つ。先端部方向には内外面ともに煤の付着は見られない。柄部は皿部を貫通させる形で柄部中内面に折り曲げる形で取り付けられている。よく見ると、粘土を折り曲げた際にできる小さな割れ目がわずかながら確認できる。柄部は短いが手で持てないほどではない。良好な十能出土例の一つとなるであろう。

輪禿皿（42）は、完存して出土した。美濃３小期のものである。内面工具により釉除去痕が輪状に剥げさせてあり、輪禿皿の名のとおりである。底部に墨痕のようなものが見られる。

稜皿（43）と（44）はいずれも美濃３・４小期のものである。輪花を施し、内外面にトチン痕が確認できる。（44）の皿内面底部には沈線二条が見られる。

反皿（45）と（46）はいずれも美濃３・４小期のものである。（45）の皿内面底部には重ね焼痕がある。

丸皿（47）は美濃５・６小期で内外面底部重ね焼痕のため釉が剥げている。

鉄絵皿（48）の絵柄は蘭である。内外面底部にトチン痕を残す。瀬戸３小期のものである。

（49）は瀬戸４小期のものである。小片のため絵柄が何かは判明しない。

（50）～（60）は土師皿である。（52）と（55）はほぼ完形である。

ＳＫ10出土遺物（61・62）

（61）は鉄絵皿で中央のモチーフに竹が描かれている。絵付けをした後に釉を施し、施釉後に高台を削り出している。内部底面にはトチン痕が見られる。ほぼ完存しており、瀬戸４小期のものである。

折縁皿（62）は、美濃５小期のものであり、内面にトチン痕が確認できる。

ＳＫ20出土遺物（63）

鉄製品（63）はキャップ状の形をしており、煙管の雁首か吸口であると思われる。錆がひどく不明な点が多い。残りが悪く図化できなかったが、大窯２・３の丸皿の小片と、15世紀代のものと思われる常滑産の甕肩部片も出土している。出土遺物が非常に少なくて、出土遺物が小片のため、性格・時期決定等で苦労させられた。

ＳＫ21出土遺物（64・65）

（64・65）は土師器皿である。（64）はＤ系統の小皿で16世紀前半のものである。口縁に油煙が付着しており、皿中央に窪みがあることから、灯明皿として使用していたものと思われる。（65）はＡ系統

の小皿で、16世紀のものである。

Ｇ19pit７出土遺物（２）

（２）は小柄の柄部分でありほぼ完存している。刀鞘に挿入する小刀であり、鞘に収められる場合は指裏の位置になる。元禄時代以降著しく装飾性を増していくのだが、当出土品も扇型の浮き彫りを施している。近世遺跡から出土する刀付属具の中でも他の刀付属具に比して出土量が突出する傾向が全国的にも見られる。遺物の法量は幅1.5㎝、厚さ0.4㎝、長さ10.5㎝であり、他の近世遺跡から出土する小柄の柄部分は幅約1.5㎝、厚さ約0.5㎝、長さ約9.8㎝と比べても、平均数値が似通っており、規格制の整ったものである。

ＳＫ８から出土した（26）は小柄の先端部と推定され、（２）と同一個体の可能性がある。先端に木盾が微量に確認できる。また近世には、刀剣、刀装具類が市中で販売されており、元禄期には廉価品の愛玩具であったものであると考えられる。

Ｆ33pit１出土遺物（77）

弥生土器・壺（77）は口縁部小片である。口縁部内面上部に突起が認められ、弥生時代中期のものである。これもＳＺ１・包含層等からの混入ではないかと推定している。

（２）ＳＺ１・包含層等の出土遺物

縄文時代から弥生時代の出土遺物

（66～75）は縄文土器・深鉢である。体部片（71・75）以外はすべて口縁部片である。（66）は口縁部に隆帯上に刻みを施し、二段になることが確認できる。縄文早期？のものであろう。（67～69）の口縁には押圧痕が規則的に見られる。

（67）は縄文早期末のもので、口縁部に沈線が見られる。

（68）も同じように沈線があり、縄文中期頃？のものであろう。

（69）は口縁部立ち上がりがシャープであり、縄文晩期のものである。

（70）はわずかながら口縁部が活きており、沈滞の中に刻みが見られる。

（71）は体部片であり、上から３段の短い刻みがあり、沈線３条が確認できる。沈滞の中に放射状に刻みをしたモチーフであるかもしれない。縄文中期頃？のものであろうか。

（72）は波状沈線３条が確認できる。中の内側２条の沈線が環状になっているのに対して、外側の沈線は左右に波状につながり中の沈線を囲っているように見える。波状口縁の波頂部のものである。縄文中期のものである。

（73）は縄文中期末のものである。４条の沈線からなる環状の沈滞の真下に垂下状沈線が見られる。沈滞の左上、外側の２条の沈線を切る３条の沈線が左下へ曲線状に伸びる。口縁は真っ直ぐ立ち上がっている。

（74）は垂下沈線２条と縄文ＬＲがはっきりと見られる。内面にミガキ？のような技法を使っている。口縁部がやや内湾している。縄文中期末頃？のものであろうか。

（75）は縄文中期末のものであり、断面上下に粘土紐接合痕がある。外面に垂下沈線が「ハの字」状に見られ、ハケメが明確に識別できるのが特徴的である。

（76～78）は弥生土器・壺である。おそらく、弥生中期のものと思われる。（76）は底部である。（77）は広口壺の口縁部であり。口縁部内面上部に浮紋があり、口縁部外面側面には細かい波状紋が見られる。（78）は内外面ともに1.5㎝の10本一単位を規格としたハケメが施されている。

鎌倉時代から室町時代の出土遺物

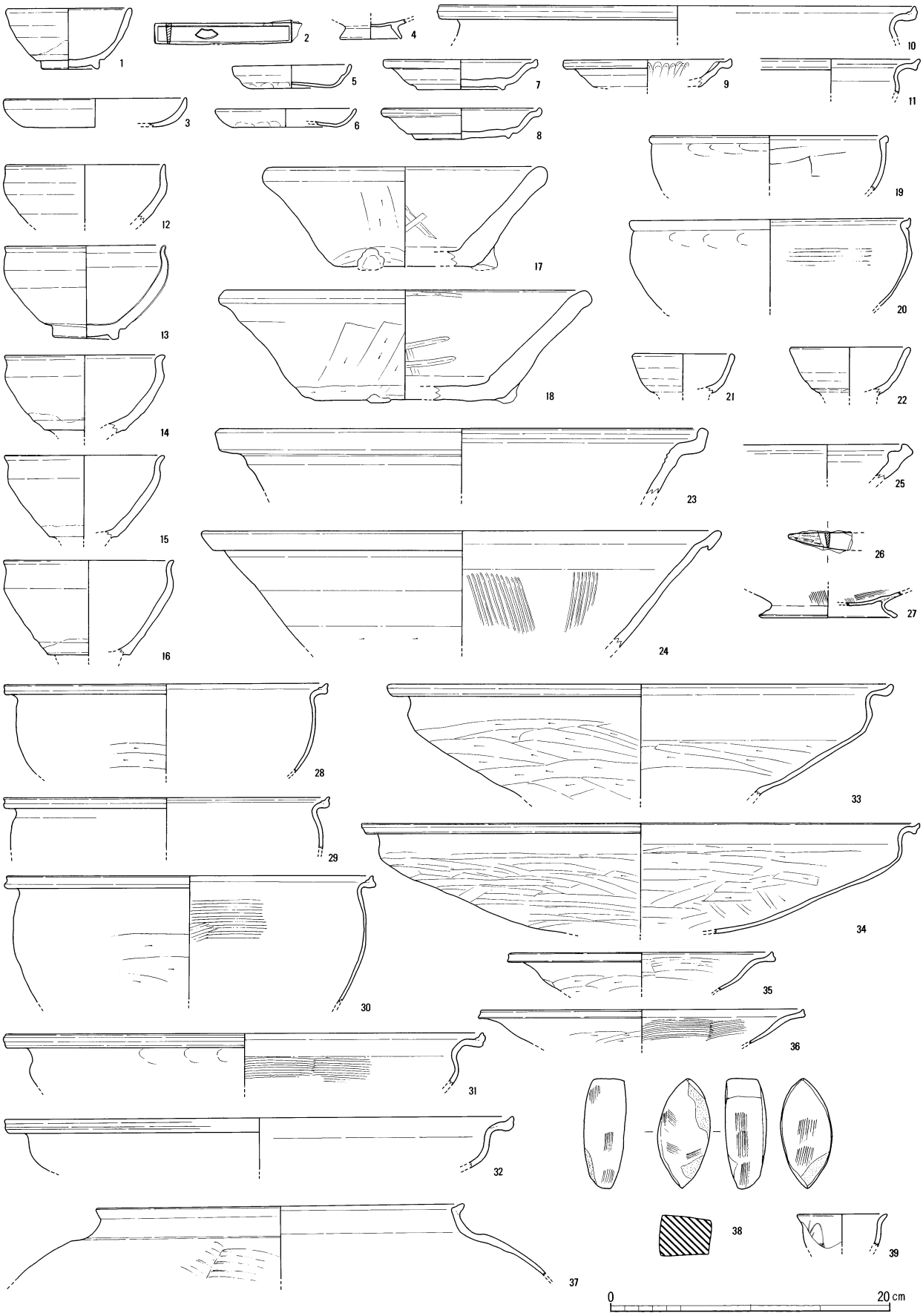
（79）は南伊勢系土師器皿である。13世紀後半のＢ系統のもので、山茶椀の６・７形式と平行する。

（80・81）は山茶椀である。いずれも、６形式のもので、底部に籾殻痕と糸切り痕を残す。

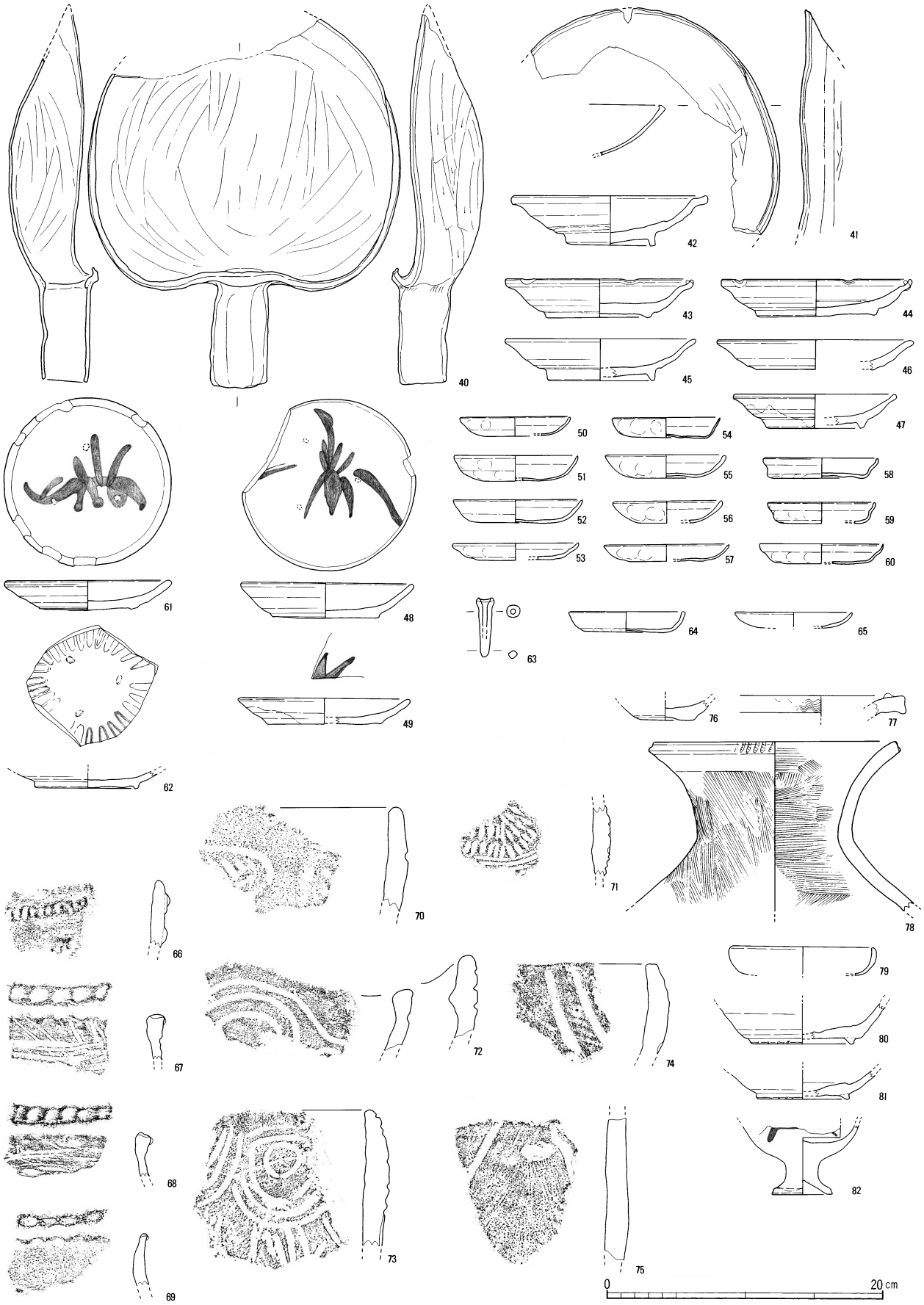
江戸時代前期以降の出土遺物

（82）は磁器の仏具である。仏飯器の底部であり、肥前産のものと思われる。外面に絵付けを施してあるが、残りが良くないため、何かはわからない。幕末のものであろうか？

（大村　伸一）



第12図　出土遺物実測図①（1：4）



第13図　出土遺物実測図②（1：4）、66～75（1：3）

番号	RNo.	器種	遺構 層位	計測値 径(cm)	計測値 器高(cm)	残存	調整・技法の特徴	胎土(cm)	焼成	色調	特記事項
1	016-01	天目小椀	G20 Pit6	口 (9.0) 台 4.1	4.3	口6／12台 完存	外:ロクロナデ→削り出し高台 内:ロクロナデ	密	良	釉:灰褐7.5YR4／2 素:淡黄2.5Y8／3	鉄釉　重ね焼痕
2	016-03	小柄	G19 Pit7	幅 1.5	厚 0.4	残長10.5	錆びのため不明				扇型の浮紋　26と同一個体の可能性あり
3	017-05	土師器皿	SD24	(13.0)	－	2／12	外:ヨコナデ→ナデ 内:ヨコナデ→ナデ	やや密	やや良	外:にぶい橙7.5YR7／4 内:橙5YR7／6	南伊勢B系統のⅡb期
4	012-03	台付小椀	SK7	台 4.4	－	台 4／12	外:貼り付け高台→ナデ　　内:ナデ	やや密 (0.1)	やや良	浅黄橙7.5YR8／4	底部、16C以降
5	012-04	土師器皿	SK7	(8.4)	1.65	1／12	外:ヨコナデ→ナデ→オサエ 内:ヨコナデ→ナデ	やや密(0.1～0.2)	やや良	にぶい橙7.5YR7／4	
6	012-05	土師器皿	SK7	(10.0)	1.3	3／12	外:ヨコナデ→ナデ→オサエ 内:ヨコナデ→ナデ	やや粗(0.1～0.2)	やや良	浅黄橙10YR8／3 暗灰N3／0(断面)	
7	001-02	折縁皿	SK7	口(10.8) 台 (6.2)	2.1	口 3／12 台 6／12	外:ロクロナデ→削り出し高台後施釉 内:ロクロナデ後施釉	密	やや良	灰白N8／0 灰白7.5YR7／2	大窯4前半　底部重焼痕
8	012-07	折縁皿	SK7	口(11.4) 台 (6.7)	2.2	口 1／12 台 7／12	外:ロクロナデ→貼り付け高台→回転糸きり後施釉　　内:ロクロナデ後施釉	密	良	灰白N8／0	大窯4前半 底部重焼痕
9	012-06	折縁皿	SK7	口(12.1)	－	口 1／12	外:ロクロナデ後施釉　内: 〃	密	良	素:灰白10YR8／2 釉:オリーブ黄7.5YR6／3	大窯4後半
10	012-02	鍋	SK7	口(34.2)	－	口 2／12	外:ヨコナデ　　内: 〃	やや密(0.1～0.2)	やや良	にぶい黄橙10YR7.4、7／3 黒N2／0(断面)	口縁部外面煤付着
11	012-01	鍋	SK7	－	－	－	外:ヨコナデ　　内:ヨコナデ→ナデ	やや密 (0.1)	やや良	浅黄橙10YR8／4 橙5YR7／6	
12	014-06	天目茶椀	SK8	口(12.4)	－	口 3／12	外:ロクロナデ後施鉄釉　　内: 〃	密	良	素:灰白2.5YR8／1 釉:黒7.5YR2／1	瀬戸6小期
13	002-02	天目茶椀	SK8 No3	口(11.3) 台 (6.5)	6.5	口 6／12 台 完存	外:ロクロナデ→ロクロ削り →削り出し高台後施釉　　内:ロクロナデ後鉄釉	やや密	良	素:灰白2.5YR8／2 釉:黒褐5YR2／1	瀬戸6小期　　歪みあり
14	014-07	天目茶椀	SK8 No25	口(11.4)	－	口 3／12	外:ロクロナデ→ロクロ削り後鉄釉 内:ロクロナデ後鉄釉	密	良	素:灰白2.5Y8／2 釉:赤黒2.5YR1.7／1	瀬戸6小期
15	014-08	天目茶椀	SK8	口(11.4)	－	口 2／12	外:ロクロナデ→ロクロ削り後鉄釉 内:ロクロナデ後鉄釉	密	良	素:にぶい橙5YR6／4 灰白2.5Y8／2 釉:黒褐5YR2／2	大窯3
16	014-05	天目茶椀	SK8	口(12.1)	－	口 3／12	外:ロクロナデ→ロクロ削り→削り出し高台後鉄釉　内:ロクロナデ後鉄釉	密	良	素:灰白2.5Y8／2 釉:赤褐10R1.7／1	瀬戸・美濃3小期
17	011-02	鉢	SK8 No1	口(20.3)	－	口 1／12	外:ヨコナデ→削り→貼り付け台→削り 内:ヨコナデ→ナデ	やや粗(砂粒多く含む)	良	外:橙5YR7／6 内:にぶい橙5YR6／4	外面底部貼り付け台3方 内面胴部押引状刻み
18	011-01	鉢	SK8 No6	口(26.5)	7.8	口 1／12	外:ヨコナデ→削り→貼り付け高台→削り 内:ヨコナデ→ナデ	やや粗(～2㎜の砂含む)	良	外:にぶい橙7.5YR7／4 内:　　〃	外面底部貼り付け台3方 内面胴部押引状刻み
19	008-02	鉢	SK8 No10	口(17.0)	－	口 5／12	外:ヨコナデ→削り 内:ヨコナデ→工具によるナデ	やや密	やや良	外:橙7.5YR7／6 内:橙5YR7／6	
20	008-04	鉢	SK8 No20	口(20.0)	－	口 3／12	外:ヨコナデ→削り 内:ヨコナデ→ハケメ	やや粗	やや良	外:橙7.5YR7／6 内:橙5YR7／6	
21	013-05	小椀	SK8	口(7.3)	－	口 4／12	外:ロクロナデ→ロクロ削り後施釉 内:ロクロナデ後施釉	密	良	素:浅黄橙10YR8／3 釉:灰白5Y7／2	美濃5～6小期
22	014-03	小椀	SK8	口(8.6)	－	口 4／12	外:ロクロナデ→ロクロ削り後施釉 内:ロクロナデ後施釉	密	良	素:灰白2.5Y8／1 釉:褐7.5YR4／3	美濃5～6小期 内面底部重ね焼痕
23	015-01	鉢?	SK8	口(35.0)	－	口 2／12	外:ロクロナデ後施釉　　内: 〃	密	良	釉:灰赤2.5YR4／2 断面:にぶい黄橙10YR6／3	瀬戸3～4小期 内面上部に櫛目状沈線3～4本
24	002-03	擂鉢	SK8 No11	口(36.6)	－	口 3／12	外:ロクロナデ→ロクロ削り→全体に施錆釉　内:ロクロナデ→施錆釉	やや密	良	釉:にぶい赤褐5YR5／3～4／3	瀬戸5小期 櫛目12本(3.6cm) 下から上へ
25	013-04	擂鉢	SK8	－	－	－	外:ロクロナデ後施鉄釉　　内: 〃	密	良	素:灰白2.5Y8／2 釉:暗赤灰5R4／1	大窯4後半 口縁部片
26	016-04	小柄	SK8	幅 1.5	厚 0.4	残長4.5	錆びのため不明				先端部　木質あり 2と同一個体の可能性あり
27	010-05	台付椀	SK8	台(10.0)	－	台 3／12	外:ハケメ→ヨコナデ→ナデ 内:ハケメ	やや密(～2㎜の砂含む)	良	外:にぶい橙7.5YR7／4 内:　　〃	底部、16C以降
28	010-01	鍋	SK8	口(23.0)	－	口 2／12	外:ヨコナデ→ナデ→削り 内:ヨコナデ→ナデ	やや密(～1㎜の砂含む)	良	外:にぶい褐7.5YR6／3 内:　　〃	外面上部煤付着
29	010-03	鍋	SK8	口(23.1)	－	口 2／12	外:ヨコナデ→ナデ 内:ヨコナデ→ナデ	やや密(砂粒含む)	良	外:にぶい橙7.5YR7／4 内:　　〃	外面上部煤付着
30	011-03	鍋	SK8	口(26.8)	－	口 1／12	外:ヨコナデ→ナデ→削り 内:ヨコナデ→ナデ→ハケメ	やや密(～1㎜の砂含む)	良	外:にぶい橙7.5YR7／4 内:　　〃	内面ハケメ5本(1cm)
31	010-02	鍋	SK8 No18	口(34.2)	－	口 1／12	外:ヨコナデ→ナデ→オサエ 内:ヨコナデ→ナデ→ハケメ	やや密(砂粒含む)	良	外:にぶい橙7.5YR6／3～灰褐7.5YR5／2 内:　　〃	外面上部煤付着 ハケメ8本(1cm)
32	013-02	鍋	SK8 No23	口(36.2)	－	口 2／12	外:ヨコナデ→ナデ→ヘラ削り 内:ヨコナデ→ナデ	やや密(～1㎜の砂含む)	やや良	外:にぶい橙7.5YR7／4 内:灰褐7.5YR5／2	内面上部煤付着
33	008-01	焙烙	SK8 No15	口(36.0)	－	口 3／12	外:ヨコナデ→削り 内:ヨコナデ→削り	やや粗	やや良	外:褐灰7.5YR4／1 内:にぶい褐7.5YR6／3	外面煤付着
34	004-01	焙烙	SK8 No15	口(39.8)	－	口 3／12	外:ヨコナデ→削り後ナデ 内:ヨコナデ→削り後ナデ	密(微砂粒少含)	やや良	外:褐灰5YR4／1 ・黒N2／ 内:にぶい褐7.5YR6／3	
35	008-03	焙烙	SK8	口(18.7)	－	口 5／12	外:ヨコナデ→削り 内:ヨコナデ→工具によるナデ	やや粗	やや良	外:黒褐10YR3／1 内:黒褐10YR3／1	
36	010-04	焙烙	SK8	口(23.2)	－	口 1／12	外:ヨコナデ→削り 内:ヨコナデ→ハケメ	やや密(～2㎜の砂含む)	良	外:にぶい黄橙10YR7／2 褐灰10YR5／1 内:　　〃	
37	007-01	土師茶釜	SK8 No21	口(26.2)	－	口 6／12	外:ヨコナデ→工具によるナデ 内:ヨコナデ→ナデ	やや密	やや良	外:にぶい橙7.5YR7／4 内:　　〃	
38	014-01	砥石	SK8	重量111.27g		－	全面使用痕	－	－	－	一部焼き跡
39	014-02	磁器(小椀)	SK8	口(6.4)	－	口 3／12	外:ロクロナデ後施釉　　内:　　〃	密	良	素:灰白N8／0 釉:明青灰10GB7／1	中国産　絵付け
40	005-01	十能?	SK8 No16 下	全長 (27.2)	5.9	11／12	外:ヨコナデ→ナデ・オサエ→削り 内:ヨコナデ→ナデ→削り	密	良	外:にぶい黄橙10YR7／4 灰黄褐10YR5／2 内:　　〃	ほぼ完存 柄部空洞(7.7cm) 柄部分内外面煤付着
41	006-01	十能?	SK8 No16	－	－	2／12	外:ヨコナデ→ナデ・オサエ→削り 内:ヨコナデ→ナデ→削り	やや密	やや良	外:灰黄褐10YR5／2 内:　　〃	先端部
42	001-01	輪禿皿	SK8 No5	口 13.8 台 6.4	3.6	完形	外:ロクロナデ→ロクロ削り→削り出し高台後施鉄釉　内:ロクロナデ後施鉄釉	密	良	素:灰白2.5Y8／2 釉:にぶい赤灰5YR4／3	美濃3小期 内面工具により釉除去痕 完存　　底部墨痕？

第３表　出土遺物観察表

番号	RNo.	器種	遺構 層位	計測値 径(cm)	計測値 器高(cm)	残存	調整・技法の特徴	胎土(cm)	焼成	色調	特記事項
43	015-02	稜皿	SK8	口(13.5) 台 7.4	2.8	口 5/12 台12/12	外:ロクロナデ→削り出し高台後施釉 内:ロクロナデ後施釉	密	良	素:灰白5Y7/2 釉:黄灰2.5YR6/1	美濃3～4小期 内外面トチン痕 輪花2/5残存 台部完存
44	003-03	稜皿	SK8 No9	口(13.5) 台 8.5	2.6	口 9/12 台12/12	外:ロクロナデ→ロクロ削り後施釉→削り出し高台→糸切り後削り 内:ロクロナデ後施釉	密	良	素:灰白2.5Y8/2 釉:浅黄2.5Y7/3	美濃3～4小期 内外面トチン痕 輪花4/5残存 台部完存 内底部沈線2
45	015-03	反皿	SK8	口(13.6) 台(7.7)	3.0	口 3/12 台 6/12	外:ロクロナデ→削り出し高台→ロクロ削り後施釉 内:ロクロナデ後施釉	密	良	素:淡黄2.5Y7/3 釉:浅黄2.5Y7/3	美濃3～4小期 内底部重ね焼痕
46	014-04	反皿	SK8 No17	口(14.2)	－	口 3/12	外:ロクロナデ→ロクロ削り後施釉 内:ロクロナデ後施釉	密	良	素:灰白2.5Y8/2 釉:灰白7.5Y7/2	美濃3～4小期
47	015-04	丸皿	SK8	口(11.8) 台(7.0)	2.4	口 4/12 台 4/12	外:ロクロナデ→削り出し高台→ロクロナデ後施釉 内:ロクロナデ後施釉	密	良	素:灰黄2.5Y6/2 釉:浅黄5Y7/3	美濃5～6小期 内外面底部重ね焼痕で釉剥げる
48	003-01	鉄絵皿(蘭)	SK8 No2	口(12.1) 台 7.6	2.5	口11/12 台12/12	外:ロクロナデ→ロクロ削り→削り出し高台→糸切り後施釉 内:ロクロナデ→絵付け後施釉	密	良	素:灰黄2.5Y8/2 釉:浅黄2.5Y7/3 絵:黒褐10YR3/1	瀬戸3小期 内外面底部トチン痕
49	013-06	鉄絵皿	SK8	口(12.4) 台(8.2)	1.8	口 1/12 台 2/12	外:ロクロナデ→ロクロ削り→糸切り後施釉 内:ロクロナデ→絵付け後施釉	密	良	素:灰白2.5Y8/2 釉:灰白5Y8/2	瀬戸4小期
50	009-03	土師器皿	SK8	(8.0)	1.4	3/12	外:ヨコナデ→ナデ・オサエ 内:ヨコナデ→ナデ	やや密(砂粒含む)	良	外:にぶい橙7.5YR7/4 内: 〃	
51	009-05	土師器皿	SK8	(8.9)	1.9	3/12	外:ヨコナデ→ナデ・オサエ 内:ヨコナデ→ナデ	やや密(砂粒含む)	良	外:にぶい黄橙10YR7/3 内: 〃	
52	009-09	土師器皿	SK8 No27	(9.3)	1.6	8/12	外:ヨコナデ→ナデ・オサエ 内:ヨコナデ→ナデ・オサエ	やや密(砂粒含む)	良	外:にぶい橙7.5YR6/4 内: 〃	ほぼ完存
53	009-01	土師器皿	SK8	(9.0)	1.2	3/12	外:ヨコナデ→ナデ・オサエ 内:ヨコナデ→ナデ	密	良	外:にぶい橙7.5YR7/4 内: 〃	
54	009-08	土師器皿	SK8	(7.7)	1.5	3/12	外:ヨコナデ→オサエ 内:ヨコナデ→ナデ	やや密(～2㎜の砂含む)	良	外:にぶい橙7.5YR7/3 にぶい黄橙10YR7/3 内:にぶい橙5YR7/4	
55	002-01	土師器皿	SK8 No7	(8.6)	1.6	10/12	外:ヨコナデ→ナデ・オサエ 内:ヨコナデ→ナデ・オサエ	密	良	外:にぶい橙7.5YR7/4 内: 〃	ほぼ完存
56	009-02	土師器皿	SK8 No13	(7.9)	1.6	3/12	外:ヨコナデ→ナデ・オサエ 内:ヨコナデ→ナデ	やや密(砂粒含む)	良	外:にぶい橙7.5YR7/4 内: 〃	
57	009-04	土師器皿	SK8	(9.0)	1.2	2/12	外:ヨコナデ→ナデ・オサエ 内:ヨコナデ→ナデ	やや密(砂粒含む)	良	外:橙5YR6/6 内: 〃	
58	001-03	土師器皿	SK8 No4	(8.1)	1.5	6/12	外:ヨコナデ→ナデ・オサエ 内:ヨコナデ→ナデ	やや密	やや良	外:橙5YR7/6・6/6 にぶい橙7.5YR6/4 内: 〃	
59	009-07	土師器皿	SK8	(7.8)	1.5	2/12	外:ヨコナデ→ナデ・オサエ 内:ヨコナデ→ナデ・オサエ	やや密(砂粒含む)	良	外:にぶい橙7.5YR7/4 内: 〃	
60	009-06	土師器皿	SK8	(8.9)	1.4	2/12	外:ヨコナデ→ナデ・オサエ 内:ヨコナデ→ナデ	密(砂粒含む)	良	外:にぶい黄橙10YR6/3 内: 〃	
61	003-02	鉄絵皿(竹)	SK10 No1	口 11.7 台 7.0.	2.2	完形	外:ロクロナデ→ロクロ削り→糸切り後ナデ→施釉→削り出し高台 内:ロクロナデ→絵付け後施釉	やや密(～1.5㎜の砂粒含む)	良	素:灰黄2.5Y8/2 釉:灰白5Y8/2 絵:黒褐2.5Y3/1	瀬戸4小期 完存 内部底面トチン痕
62	015-05	折縁皿	SK10	台 7.4	－	台12/12	外:ロクロ削り後ロクロナデ 内:ロクロナデ後施釉	密	良	素:淡黄2.5Y8/3 釉:淡黄5Y8/3	美濃5小期 内面トチン痕
63	016-05	鉄製品	SK20	－	幅～1.0	残長(4.2)	錆びのため不明				煙管の雁首・吸口？ キャップ状
64	017-03	土師器皿	SK21	(8.3)	1.5	8/12	外:ヨコナデ→オサエ 内:ヨコナデ→ナデ	やや密	良	外:浅黄橙7.5YR8/4 内: 〃	口縁部一部油煙付着 D系統小皿・16C前
65	017-06	土師器皿	SK21	(8.4)	－	4/12	外:ヨコナデ→オサエ 内:ヨコナデ→ナデ	やや密	やや良	外:橙5YR7/6 内: 〃	A系統小皿・16C～
66	019-06	縄文土器・深鉢？	SZ1 トレンチ	－	－	口縁部片	外:ヨコナデ→隆帯上刻み 内:ヨコナデ	やや密(～13㎜の砂粒少含む)	良	外:浅黄橙10YR8/4 内:にぶい黄橙10YR7/4	縄文早期？
67	019-02	縄文土器・深鉢？	G1 西壁	－	－	口縁部片	外:押圧→ナデ→沈線 内:押圧→ナデ	密	良	外:橙2.5Y6/8 内: 〃	縄文早期末
68	018-07	縄文土器・深鉢	SZ1	－	－	口縁部片	外:押圧→ナデ→沈線 内:押圧→ナデ	やや密	良	外:橙5YR6/8 内: 〃	縄文中期？
69	018-05	縄文土器・深鉢	I9 包含層	－	－	口縁部片	外:押圧→ナデ 内:押圧→ヨコナデ	粗(～2㎜の砂粒少含む)	良	外:にぶい黄褐10YR5/3 内:にぶい黄橙10YR6/4	縄文晩期
70	019-05	縄文土器・深鉢	表土掘削	－	－	口縁部片	外:ナデ→沈帯(中に刻み) 内:ナデ	やや密(～5㎜の砂粒多含む)	良	外:灰白10YR7/1 内:橙7.5YR7/6	縄文中期
71	018-03	縄文土器・深鉢	SZ1	－	－	体部片	外:3段に短く刻み→沈線3条	やや粗(～2㎜の砂粒少含む)	良	外:褐7.5YR4/4 内: 〃	縄文中期？ 沈帯の中の刻み？
72	019-04	縄文土器・深鉢？	表土掘削	－	－	口縁部片	外:ナデ→波状沈線3条 内:ナデ	やや粗(～2㎜の砂粒少含む)	良	外:にぶい黄橙10YR7/3 内:にぶい黄橙10YR6/3	縄文中期 波状口縁波頂部
73	018-06	縄文土器・深鉢	範囲確認調査	－	－	口縁部片	外:ナデ→沈帯→垂下状沈線 内:ナデ	やや密	良	外:褐灰10YR4/1 内:にぶい黄橙10YR7/4	縄文中期末
74	019-03	縄文土器・深鉢？	表土掘削	－	－	口縁部片	外:ナデ→垂下沈線2条・縄文LR 内:ナデ→ミガキ？	やや密(～7㎜の砂粒多含む)	良	外:にぶい黄橙10YR7/3 内: 〃	縄文中期末？
75	018-02	縄文土器・深鉢	表土掘削	－	－	体部片	外:ハケメ 内:ナデ	やや粗(～4㎜の砂粒多含む)	良	外:橙7.5YR6/6 内:明赤褐5YR5/8	縄文中期末 粘土紐節合痕上下
76	018-01	弥生土器・壺	表土掘削	底 (3.7)	－	低部9/12	外:ナデ 内:ナデ	やや粗(～3㎜の砂粒少含む)	良	外:橙7.5YR6/6 内:にぶい黄橙10YR7/3	弥生？
77	019-01	弥生土器・広口壺	F33 P1	－	－	口縁部片	外:ヨコナデ→波状紋 内:ヨコナデ→浮紋	やや密	良	外:にぶい黄橙10YR5/4 内: 〃	弥生中期
78	020-01	弥生土器・壺	表土掘削	口(18.0)	－	口 1/12	外:ヨコナデ→ハケメ10本(1.5) 内:ヨコナデ→ハケメ10本(1.5)	密(～3㎜の砂粒少含む)	良	外:橙7.5YR6/6 内:にぶい黄橙10YR6/4	弥生中期
79	017-07	土師器皿	排土	(10.6)	－	2/12	外:ナデ 内:ナデ	やや密	やや良	外:にぶい黄橙10YR7/3 内: 〃	B系統小皿・13C後
80	017-01	山茶椀	表土掘削	台 6.8	－	6/12	外:ロクロナデ→貼り付けナデ 内:ロクロナデ	密	良	外:灰白2.5Y7/1 内:灰白5YR7/1	糸切り痕 籾殻痕 知多産6形式
81	017-02	山茶椀	表土掘削	台 7.4	－	3/12	外:ロクロナデ→貼り付けナデ 内:ロクロナデ	やや密(～4㎜の小石少含む)	良	外:灰白5Y7/1 内: 〃	糸切り痕 籾殻痕 知多産6形式
82	016-02	磁器(仏飯器)	H21 包含層	底(4.3)	－	4/12	外:ロクロ削り後→絵付け後施釉 内:ロクロ使用後施釉	密	良	素:灰白10Y8/1 釉:にぶい橙7.5YR7/4 にぶい黄橙10YR7/2	肥前 絵付け

第４表　出土遺物観察表

4　結　語

ＳＫ８出土の十能について

ＳＢ27内のＳＫ８出土の十能について、若干の考察をしてみたい。十能とは、炭火を運ぶ器であり、一般的には「金属製の容器に木の柄をつけたもの」である。用途としては、「炭火を鉢へ運ぶ」だけではなく、「火をすくったり」、「熾を掻いたり」する。また、山間部では「鉄砲の弾を炒る」という用途もあるようで多くの機能がある。また、近世中期の図鑑『和漢三才図会』には、「十能」という名前ではなく、「逓火（ひかき）」として紹介されており、「銅鉄で作り、」とあり、「一種に柄が短くて板の座のあるものがある。熾きをこれに盛って席においておく。茶の湯に用いる。」とある。

当遺跡出土の十能は、内外面底部柄部分にかけては煤が付着しており、柄内部の中空の部分までもが煤付着が激しい。しかし一方、先端に向かうほど煤の付着は認められなかった。このことから、一般的な用途として、炭・炭火がこぼれ落ちないようにすくい上げるようにして持って運んだのであろうか。

一般的な村落として、十能は日常のありふれた民具の一つであった。当遺跡出土の十能は、焙烙のような薄いつくりの壊れやすい土師質の遺物である。これは「火をすくったり」、「熾を掻いたり」する本来の機能から考えると非常に不便であったはずである。焙烙の場合は熱伝導に優れているという調理面の優位性が期待できるが、十能にはそんな必要がなく薄くつくる必要がない。また柄が中空で木などを挿入して使用したのであれば、力の入れようによってはすぐ先端が割れてしまうことが容易に想像できる。県下の十能出土遺物の類例でも先端が欠けて、柄部分だけ出土というのがほとんどである。土師質の十能として「熾きを掻く」という機能は適さない。「炭火等の火のついたものを運ぶ」「火のついたものを一時的に乗せておく」というのが主要な機能であったのであろうか。

元禄期の辞書である『節用集』の一類の『書言字考節用集』では「十王」の字を当てている。「閻魔大王など冥界十王の手に似た形をしたところからついたか、」としている。

さて、様々な用途を考えられる十能であるが、「十能」ではなく「十能型土器」である可能性も考えられる。焙烙のように薄いつくりは、焙烙のように実際に調理に使ったからであろうか。豆をころころ転がして炒るとその勢いで豆は外へ飛び出すが、南伊勢系の口縁を内に折り曲げる技法は豆を炒る調理道具としては丁度良い。柄が中空なのも、炒った豆をその穴から出せば、非常に便利である。また、中空の柄には木等を挿入した痕跡が認められず、柄の中空内面に煤が付着しており、先端部内外面が煤の付着が認められない事実としての謎が解ける。「土師質の十能」は、十能ではなく、「十能型土器」ともいうべきものであり、中空の柄は注口の役割も果たしたと考えることもできる。

十能は実に様々な機能を持っていたのであろう。これからの「土師質の十能」の資料の充実とともに、十能研究の成果を待ちたい。

土坑を伴う建物について

ＳＢ27・ＳＢ28にそれぞれに土坑が伴うということが検討した結果判明した。

土坑を伴う建物というと、いわゆる「南東隅土坑」があげられる。しかし、当遺跡の土坑の位置は南東隅にはなく、ＳＢ27では、ＳＫ８は、建物の北東隅に位置する。ＳＢ28においては、ＳＫ20を南端中央に位置する。

掘立柱建物に伴う土坑の一般的な性格としては、厩（馬屋）説と厨房（台所）説の２つがある。厩説は、中世以降の農業の発展にともない牛馬の労働力や牛馬の糞に対する堆肥が貴重であったため、農家で牛馬を飼育するようになる。北東隅に厩を置く例も一部に見られるが、三重県内の古い民家の間取りに関する調査例によると、ほとんどが南東隅に厩を置いている。日本列島に見られる北西から吹く風で、厩の臭気が建物内に充満しないようにという工夫であろうかと思われる。

一方、厨房説では土坑から出土する土器の計量分析や出土遺物（厨房具）から、北東隅周辺に位置する例が民俗例からも周知されている。

ＳＢ27に伴うＳＫ８の性格としては、厨房であると推測する。出土遺物が集中したこと、出土遺物が茶椀、鉢、焙烙、十能、擂鉢、茶釜、砥石というような厨房具であること、ＳＫ８の建物内での位置が北西隅にあり、民俗例の北東隅周辺位置とほぼ似通っていること等が根拠としてあげられる。

ＳＫ８の土坑内でもほとんど北西に偏って遺物が集中しているのは、ＳＫ８という土間の北西に厨房が存在していたということであろうか。ＳＫ８の形が隅丸の長方形であることが特徴的である。

一方、ＳＢ28に伴う、ＳＫ20の性格は不明である。遺物がほとんど出土せず、ＳＫ８と比較しても土坑の形が歪み、南端中央に位置している。ただ、あえていうなら、厩かも知れないが明確な根拠はない。

ＳＢ27とＳＢ28の関係であるが、ＳＢ27の時期幅は、「大窯４」～「瀬戸５・６小期」であり、ＳＢ28の時期幅は「大窯２・３小期」である。ＳＫ20からは15世紀と見られる常滑壺の破片が出土しており、時期幅としては、若干広がるかもしれない。

そのことだけを根拠として関係性を見ると、始めにＳＢ28が存在し、次にＳＢ27が建てられたということであろう。

また、遺跡の立地条件を見ると、現在でも、近世からそのまま存在するであろう広瀬集落とは一つ離れた標高の高い所に立地してる。大明神山へ上る山道の入り口ともいうべきところにあり、そこからは広瀬集落を見下ろせる見晴らしのいい条件である。

近世遺跡としては、城下町・城跡等有名なものが多いが、地方の無名の山間部における農村の一部が発掘によって明らかにされるのは稀少である。類例の蓄積と昨今の山間部における近世農村の一端の資料になったのではないだろうか。今後の発掘調査に期待したい。

（大村　伸一）

【参考文献】

・山口佳紀編『暮らしのことば　語源辞典』（1998）

・中野照男『日本の美術６　閻魔・十王像　№313』(1992)

・寺島良安『和漢三才図会５』（1991）

・宮本長二郎『日本の美術５　民家と町並近畿　№288』（1990）

・浅尾悟「土坑を伴う中世掘立柱建物について」『一般国道１号線亀山バイパス埋蔵文化財発掘調査概報Ⅵ』（1990）

・三重県埋蔵文化財センター『一般国道475号東海環状自動車道　上惣作遺跡発掘調査報告』（2001）

Ⅳ　スブクリ遺跡の調査成果

1　地形及び基本層序

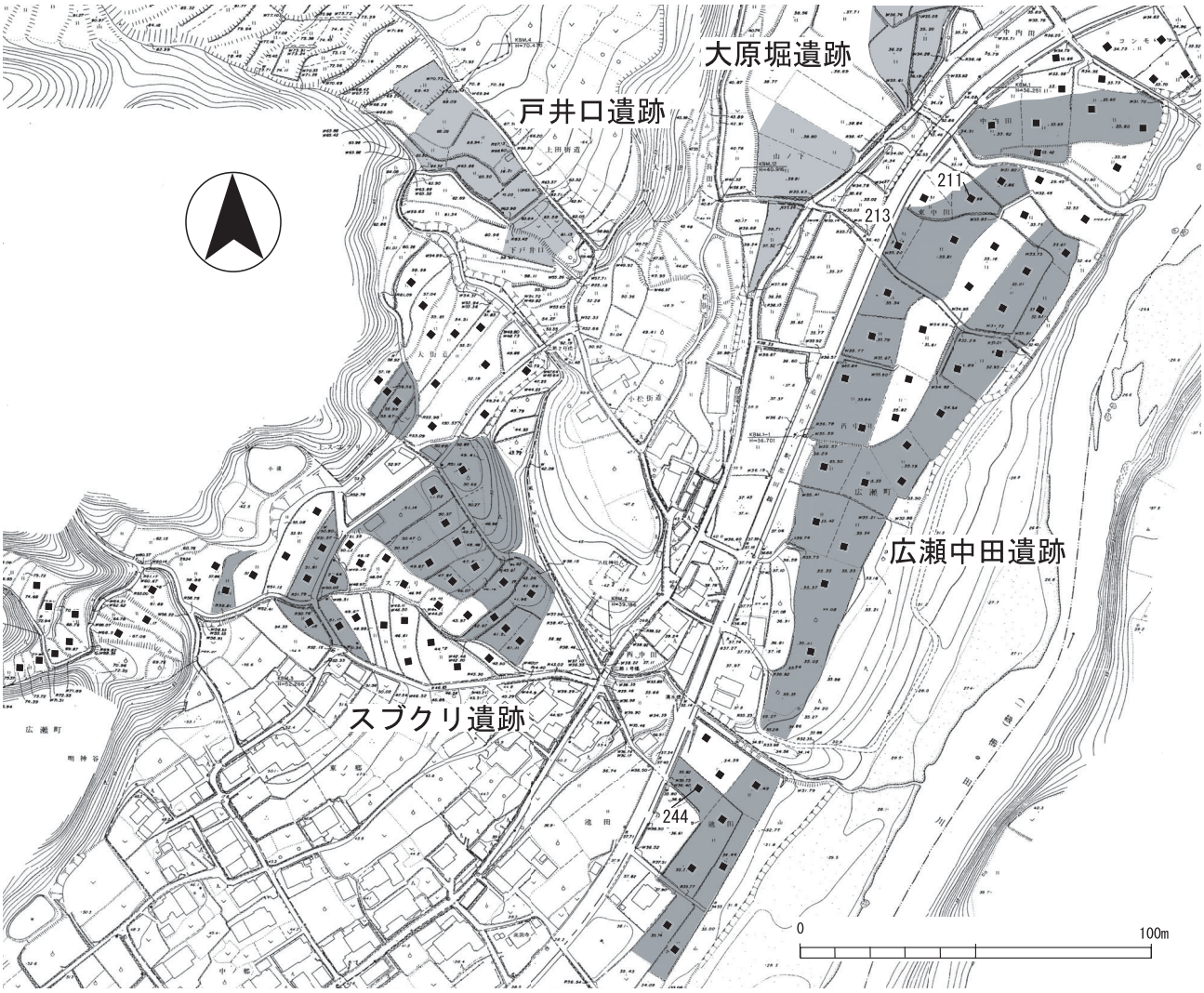
スブクリ遺跡は、櫛田川中流域左岸の河岸段丘上に立地し、行政上は松阪市広瀬町に所属する。今回の調査は、平成14年度に行われた範囲確認調査で新規に発見されたスブクリ遺跡・広瀬中田遺跡のうち、削平を受ける部分のみを対象とし、調査地はスブクリ遺跡の７地区（Ａ～Ｇ地区）のみであった。

第１次調査はＡ地区の407㎡を対象とし、調査期間は平成15年８月18日～同年８月26日である。第２次調査はＢ～Ｇ地区の６地区、900㎡を対象とし、調査期間は平成16年５月７日～５月19日までであった。

Ａ地区は、広瀬集落の北側から舌状に伸びる丘陵東裾に位置している。第２次調査区（Ｂ～Ｇ地区）は、Ａ地区の南西に位置し、Ｂ～Ｆ地区はＡ地区のある丘陵の西裾、Ｆ・Ｇ地区はこの丘陵の谷を挟んだ向かい側にあたる。

2　遺構

Ａ地区は、丘陵斜面を削平して造成した二筆の棚田であった部分である。調査の冒頭で、調査区北壁沿いにトレンチを設定し、土層観察によって旧地形の把握を行った結果、調査区は丘陵斜面を削平して谷筋の湿地を埋め立て、棚田が造成されたものと判断できた。調査区の下段部分については、耕作土直



第14図　範囲確認調査杭配置図（１：2,000）

下で砂礫層に達したことから、大幅に地山面が削平されていることが判明した。また、調査区上段部分の棚田造成時の盛土からは、中～近世の土師器や陶器などがごく少量出土したが、調査区は削平地もしくは湿地の埋立地であることから、いずれも遺構面は存在しないと判断した。

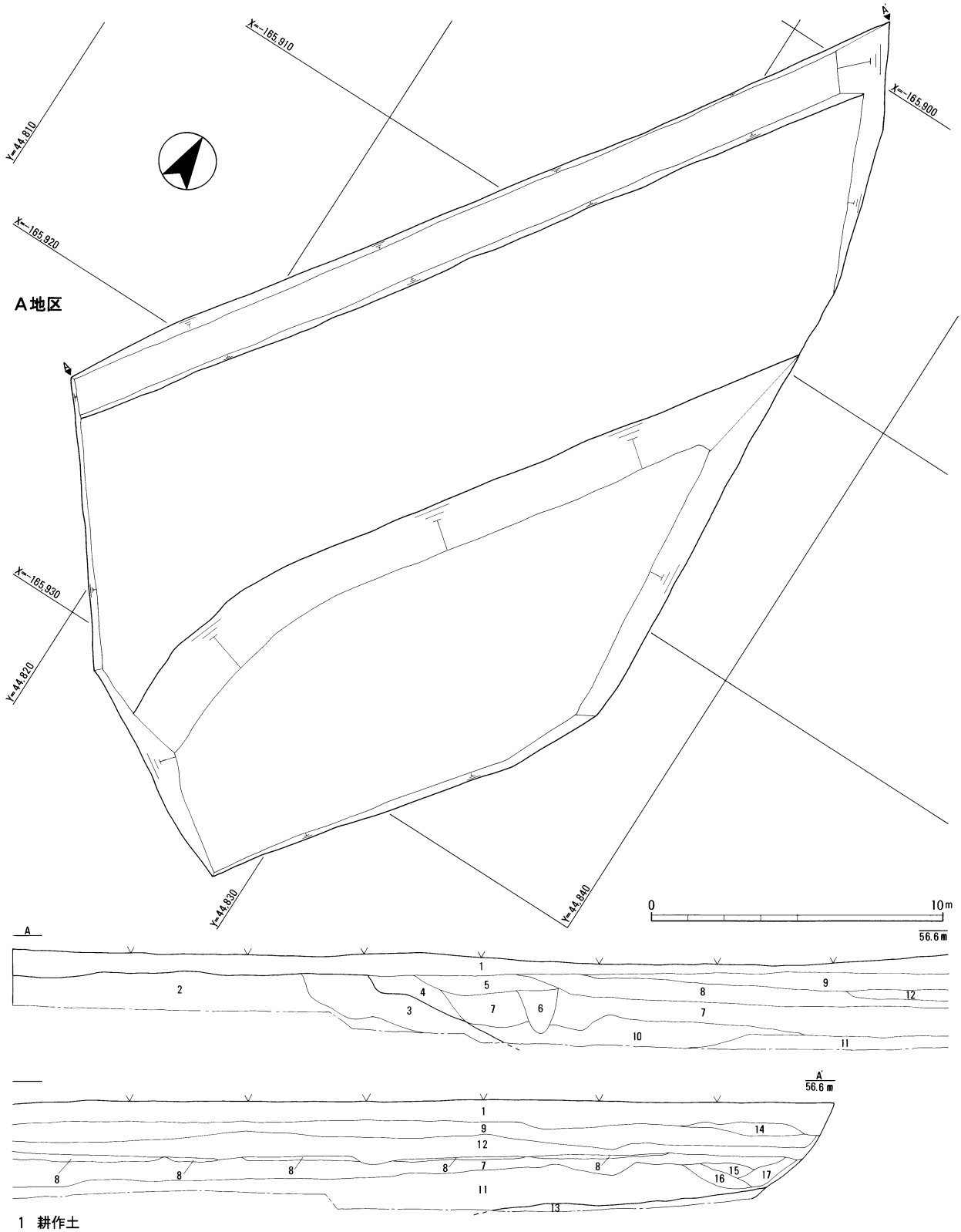
Ｂ地区では、耕土直下で近代の溝群を確認したものの、近代以前の遺構は確認できなかった。耕土下には、オリーブ黒色のいわゆる「黒ボク」層が堆積していたが、遺物は含まれておらず、遺構の存在も確認されなかった。遺物は耕作土中より、石鏃（3）・土師器鍋（5）が出土している。

Ｃ地区でも、耕作土下でピット状の穴を僅かに確認したのみで、積極的に遺構と判断できるものは確認されなかった。Ｂ地区同様、検出面下に「黒ボク」層が堆積していたが、遺構や遺物は確認されなかった。耕作土中より、縄文土器（1・2）が出土している。

Ｄ地区は、耕作に伴って激しく盛土が行われており、トレンチ幅が狭いことから、遺構面を確認することは出来なかった。

Ｅ地区は、Ｄ地区南側の谷部に位置しており、調査以前は水田が営まれていた。調査区の西側で溝を確認したが、遺物は含まれておらず、時期は不明。

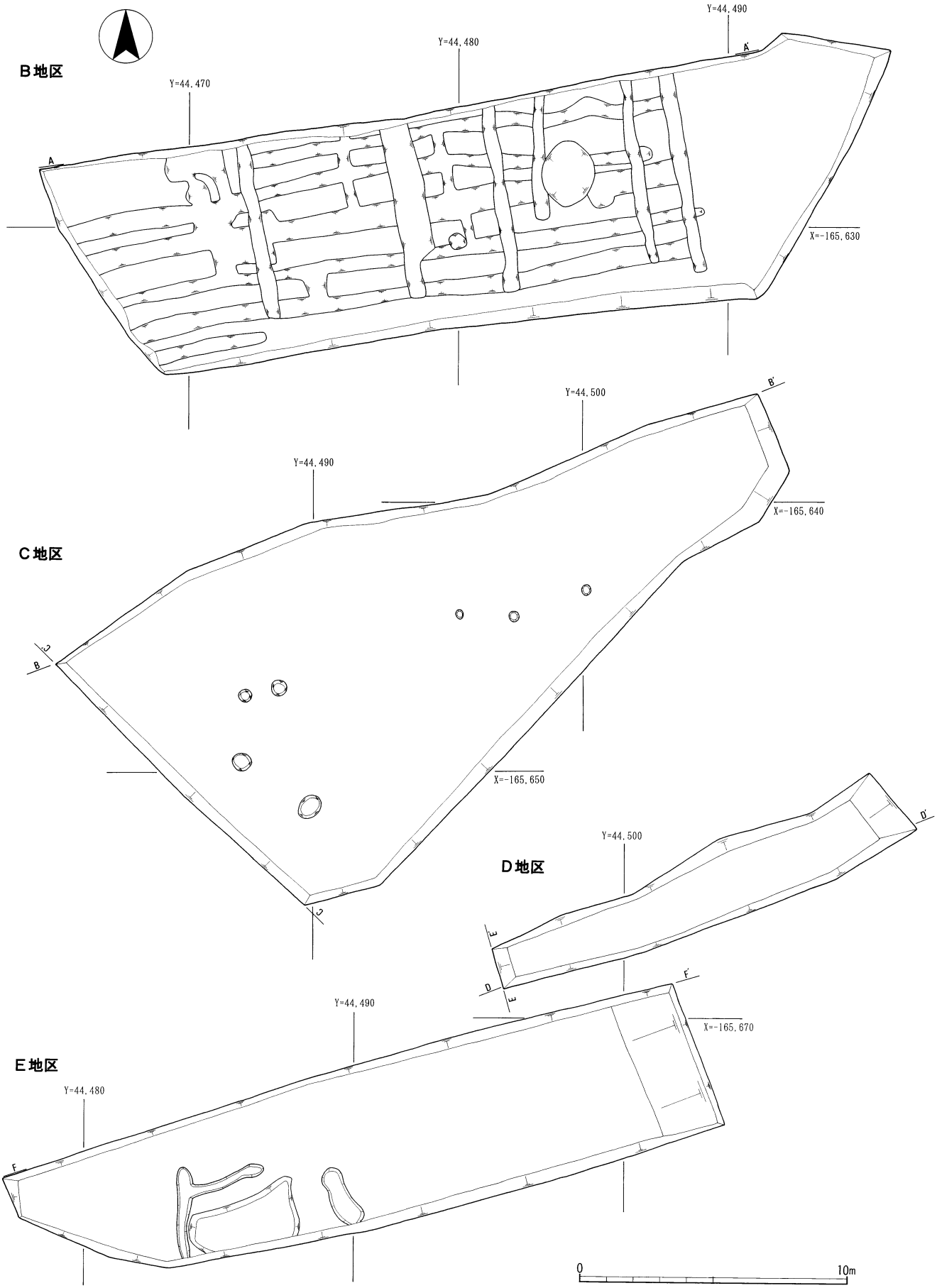
第15図　調査区位置図（1：2,000）



1 耕作土
2 明黄褐色砂礫土（10YR7/6）【地山】
3 橙色粘質小礫混土（7.5YR6/6）【地山】
4 黒褐色粘質土（7.5YR3/2）
5 橙色粘質土（7.5YR6/8）
6 褐色粘質土（7.5YR4/3）
7 明褐色粘質土（7.5YR5/8）
8 黒褐色粘質土（7.5YR3/2）
9 橙色粘質小礫混土（7.5YR6/6）【盛土】
10 にぶい褐色粘土（7.5YR5/4）
11 黒褐色土（7.5YR3/1）【湿地埋土】
12 黄褐色粘質土（10YR5/8）【盛土】
13 明黄褐色砂礫土（10YR7/6）【地山】
14 灰黄褐色粘質小礫混土（10YR5/2）
15 黒色粘質土（10YR2/1）
16 黄褐色粘質土（10YR5/6）
17 黒褐色粘質土（10YR3/2）

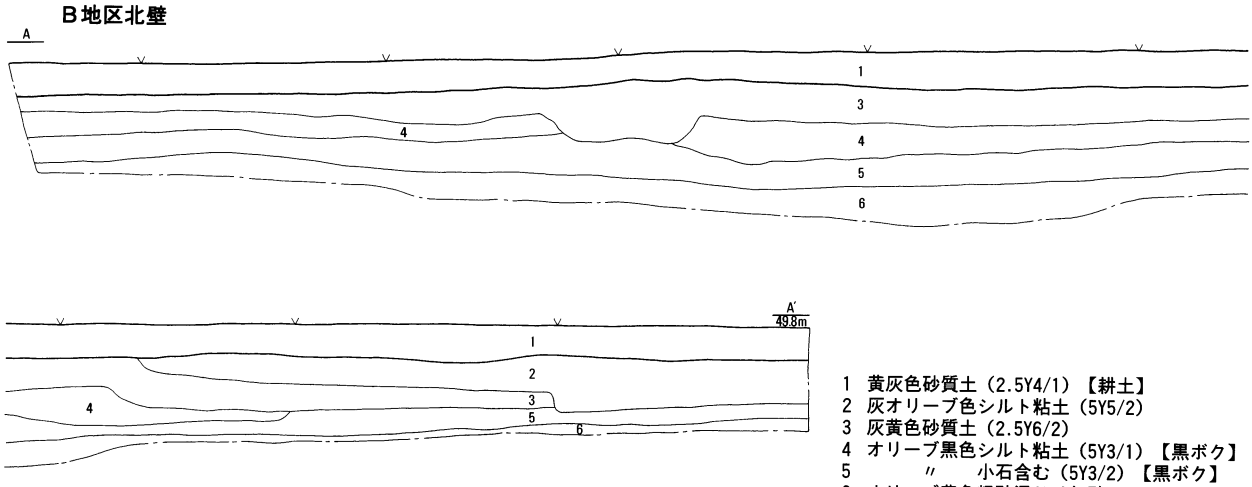
0 4m

第16図　A地区遺構平面図（1：200）・土層断面図（1：100）



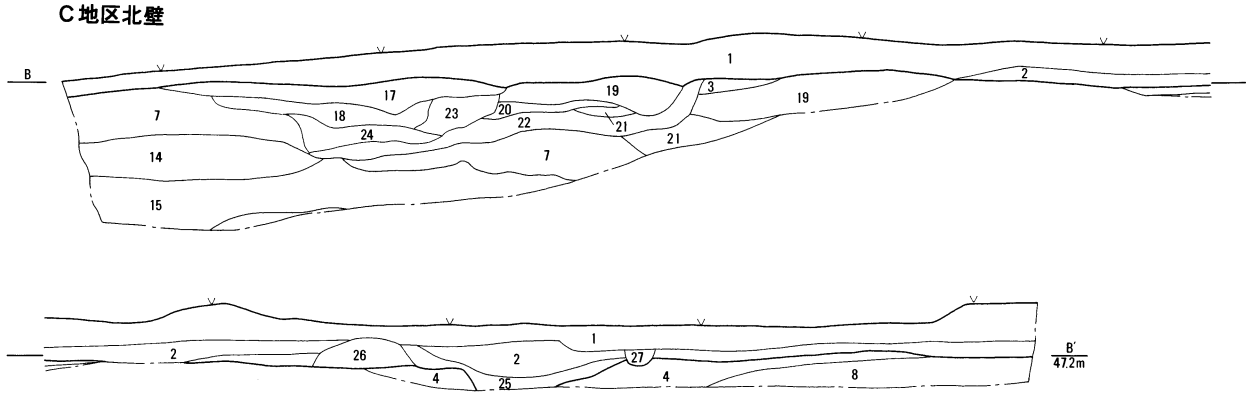
第17図　B～E地区遺構平面図（1：200）

B地区北壁

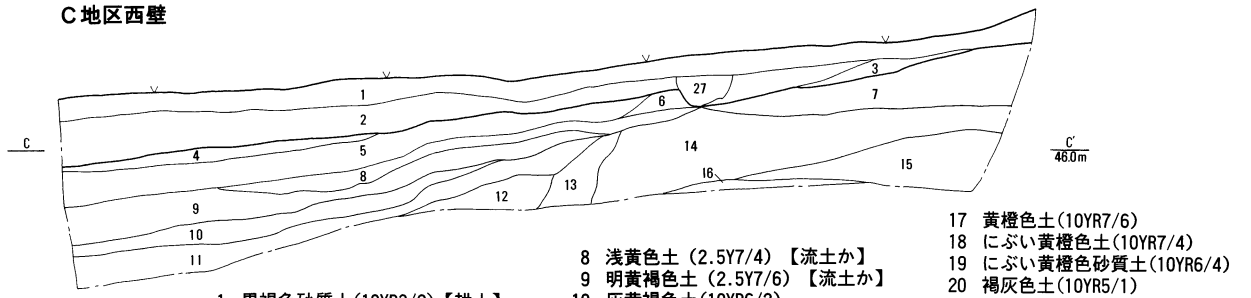


1 黄灰色砂質土（2.5Y4/1）【耕土】
2 灰オリーブ色シルト粘土（5Y5/2）
3 灰黄色砂質土（2.5Y6/2）
4 オリーブ黒色シルト粘土（5Y3/1）【黒ボク】
5 〃 小石含む（5Y3/2）【黒ボク】
6 オリーブ黄色粗砂混じり細砂

C地区北壁

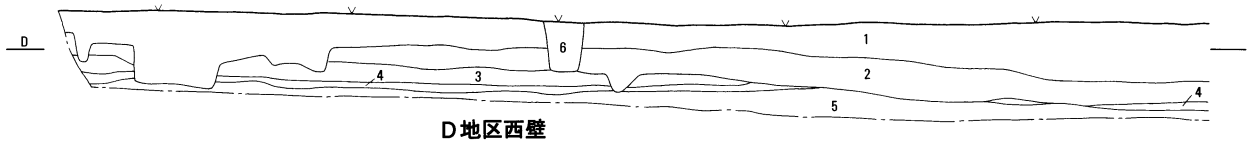


C地区西壁

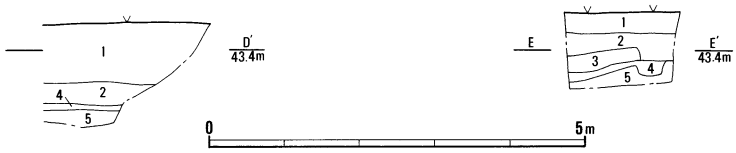


1 黒褐色砂質土(10YR3/2)【耕土】
2 褐灰色土（10YR4/1）【盛土】
3 黒褐色砂質土（2.5Y3/1）
4 にぶい黄橙色土(10YR7/4)
5 浅黄色土(10YR7/6)【流土か】
6 黄橙色砂質土(10YR7/6)
7 黒色砂質土（10YR7/1）
8 浅黄色土（2.5Y7/4）【流土か】
9 明黄褐色土（2.5Y7/6）【流土か】
10 灰黄褐色土(10YR6/2)
11 灰黄褐色土(10YR5/2)
12 黒色砂質土（2.5Y2/1）
13 黒褐色砂質土(10YR3/1)
14 浅黄色粗砂(2.5Y7/3)
15 浅黄色細砂(2.5Y7/3)
16 黒色砂質土（10YR7/1）
17 黄橙色土(10YR7/6)
18 にぶい黄橙色土(10YR7/4)
19 にぶい黄橙色砂質土(10YR6/4)
20 褐灰色土(10YR5/1)
21 暗灰黄色土(2.5Y5/2)
22 灰黄褐色土（10YR5/2）
23 にぶい黄橙色砂質土(10YR6/3)
24 黒褐色砂質土(10YR3/1)
25 灰黄色粗砂（2.5Y7/2）
26 浅黄色砂質土(2.5Y7/3)
27 撹乱

D地区南壁

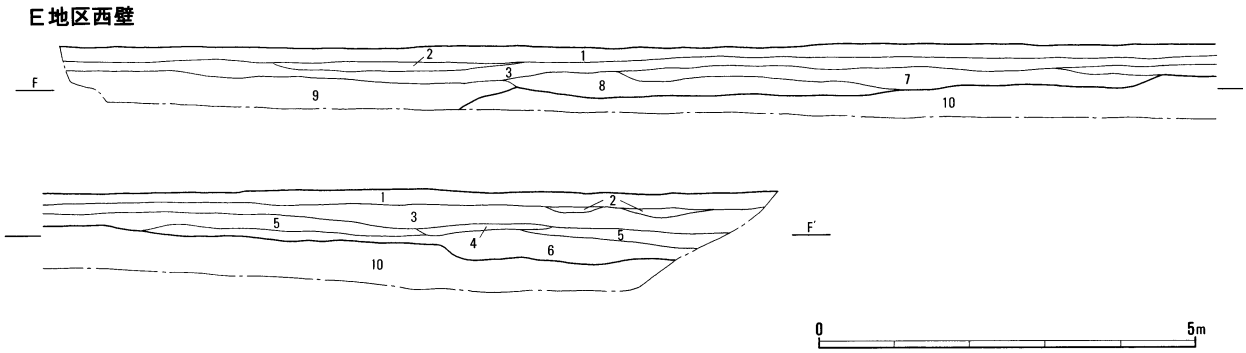


D地区西壁



1 黄灰色シルト（2.5Y6/1）【耕土】
2 黄灰色シルト（2.5Y5/1）【耕土】
3 にぶい黄色粗砂（2.5Y6/3）
4 暗灰黄色砂質土(2.5Y5/2)
5 浅黄色粗砂(2.5Y7/4)【盛土】
6 灰色砂質土（5Y5/1）

第18図　B～D地区土層断面図（1：100）



1 黄灰色シルト(2.5Y6/1)【耕土】
2 淡黄色細砂（2.5Y8/3）
3 暗灰黄色砂質粘土（2.5Y5/2）
4 浅黄色細砂（5Y7/3）
5 灰オリーブ色粗砂混じりシルト（5Y6/2）
6 灰オリーブ色粗砂混じりシルト（5Y5/2）
7 灰白色粗砂混じり砂質土（5Y7/1）
8 にぶい黄色砂礫(2.5Y6/4)
9 灰白色粗砂混じり細砂・礫多い(7.5Y7/1)【谷埋土】
10 灰白色粗砂混じり細砂（5Y7/2）【地山】

第19図　E地区土層断面図（1：100）

F・G地区は、A～E地区の谷を挟んだ対岸に位置する。F地区では、地山面で溝やピットを確認したが、遺物は含まれておらず、時期は不明である。調査区の東側は、谷に向かって落ち込んでいた。G地区は谷筋にあたり、底面には巨大な岩が多数含まれていた。遺構は確認されなかった。

（2）遺物

1は縄文後期前葉の深鉢口縁部で、内外面ともミガキ調整が施される。内面は右から左に向けて調整が行われている。中津式より後出するものと考えられる。2も後期前葉の深鉢口縁部で、中津式の擦り消し縄文土器で筒状の突起を持つ。口縁端部上面にも縄文が施される。3は赤色チャートの石鏃で、やや厚みがあり、加工は粗い。先端及び片端が欠損している。4は弥生前期の甕で、口縁端部には条痕文が見られる。口縁部内面には、5・6は土師器の鍋である。6は伊藤裕偉氏の土師器編年4段階にあたり、16世紀頃と考えられる[①]。7は砂岩製の一石五輪塔で、水輪・地輪部分。8～10は範囲確認調査で出土したもの。8は弥生中期後葉の甕で、口縁端部が上方につまみ上げられる。9・10は土錘である。

（3）小結

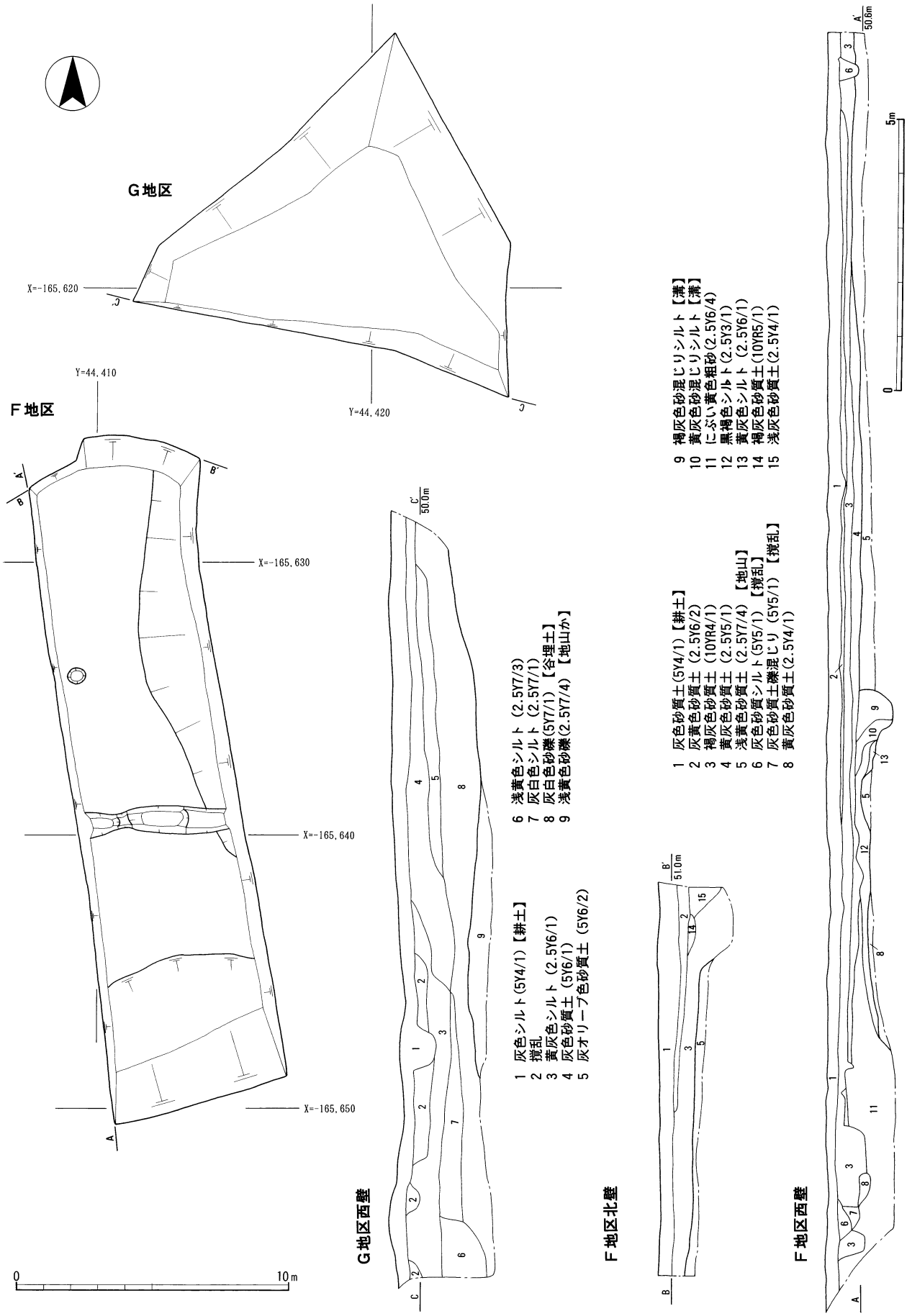
今回のスブクリ遺跡の調査では、時代の判別できる明確な遺構は確認できなかった。しかし、縄文時代後期頃の深鉢や石鏃が出土しており、縄文集落が近辺に存在しているものと考えられる。

一方、今回の事業に伴う範囲確認調査で遺跡の存在が明らかとなった広瀬中田遺跡は、スブクリ遺跡の南、櫛田川左岸の低位段丘上に位置している。ここからも弥生中期の甕や土錘が出土しており、弥生時代や中世を中心とした集落跡が存在するものと思われる。

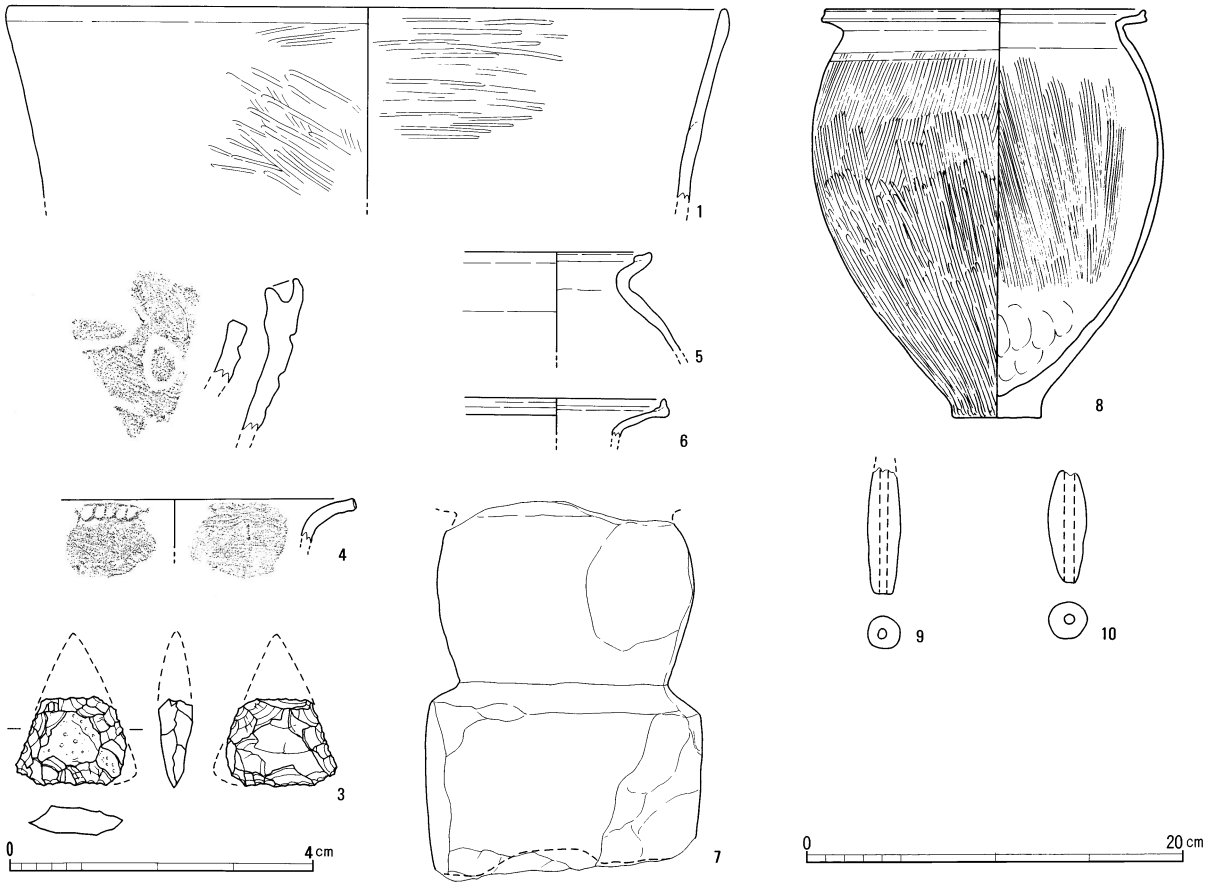
（小山　憲一・新名　強）

【註】

① 伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」『Mie history』vol.1　三重歴史文化研究会、　1990



第20図　F・G地区遺構平面図（1：200）・土層断面図（1：100）



第21図　遺物実測図（１：４、３は原寸）

番号	登録番号	種別器形	グリッド遺構・層	計測値（cm）	調整	胎土焼成	色調	残存	備考
1	2-1	縄文土器深鉢	C地区耕作土	口径　38.0	ハケ→ミガキ	粗良	にぶい橙	口径1/12	
2	2-2	縄文土器深鉢	C地区耕作土	―	縄文、擦り消し	粗良	にぶい黄橙	小片	
3	4-1	石鏃	B地区耕作土	―	―	-	-	小片	赤色チャート 重量　6.20g
4	2-3	弥生土器甕	F地区包含層	―	外面：口縁端部条痕文 内面：波状文？	粗良	にぶい橙	小片	外面煤付着
5	1-2	土師器鍋	B地区耕作土	―	外面：ナデ 内面：工具ナデ	粗良	灰白	小片	
6	1-3	土師器鍋	F地区包含層	―	ナデ	密良	にぶい橙	小片	外面煤付着
7	1-1	一石五輪塔	G地区表採	―	―	粗良	-	8/12	水輪・地輪部分 砂岩
8	3-1	弥生土器甕	調査坑No.213	口径　16.9 器高　21.5	外面：ナデ、ハケ 内面：ナデ、ハケ、オサエ	粗良	浅黄橙	11/12	広瀬中田遺跡 底径　4.6cm
9	3-2	土錘	調査坑No.221	幅　1.8	ナデ	粗良	灰白	ほぼ完形	広瀬中田遺跡
10	3-3	土錘	調査坑No.244	幅　2.0	ナデ	粗良	にぶい黄橙	ほぼ完形	広瀬中田遺跡

第５表

写　真　図　版

図版１　戸井口遺跡

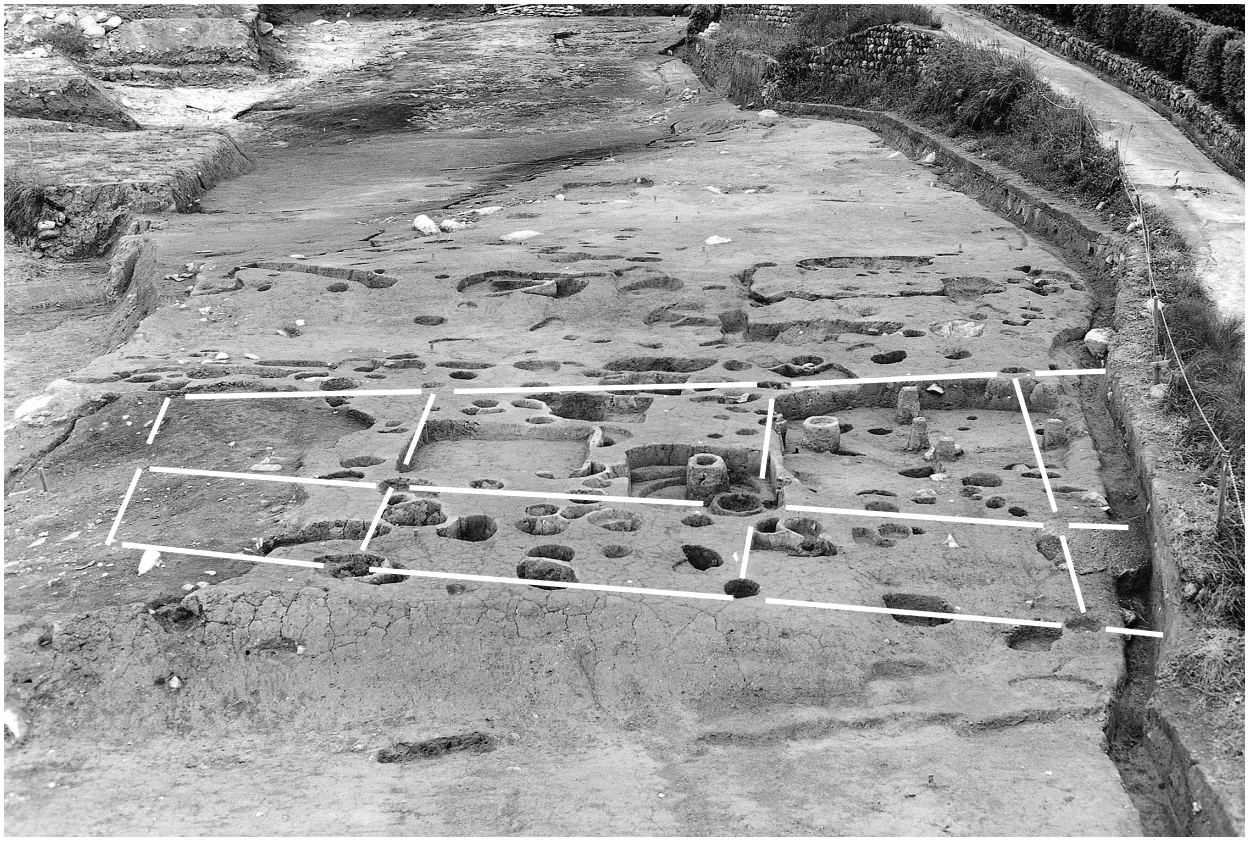
調査区遠景

調査前風景

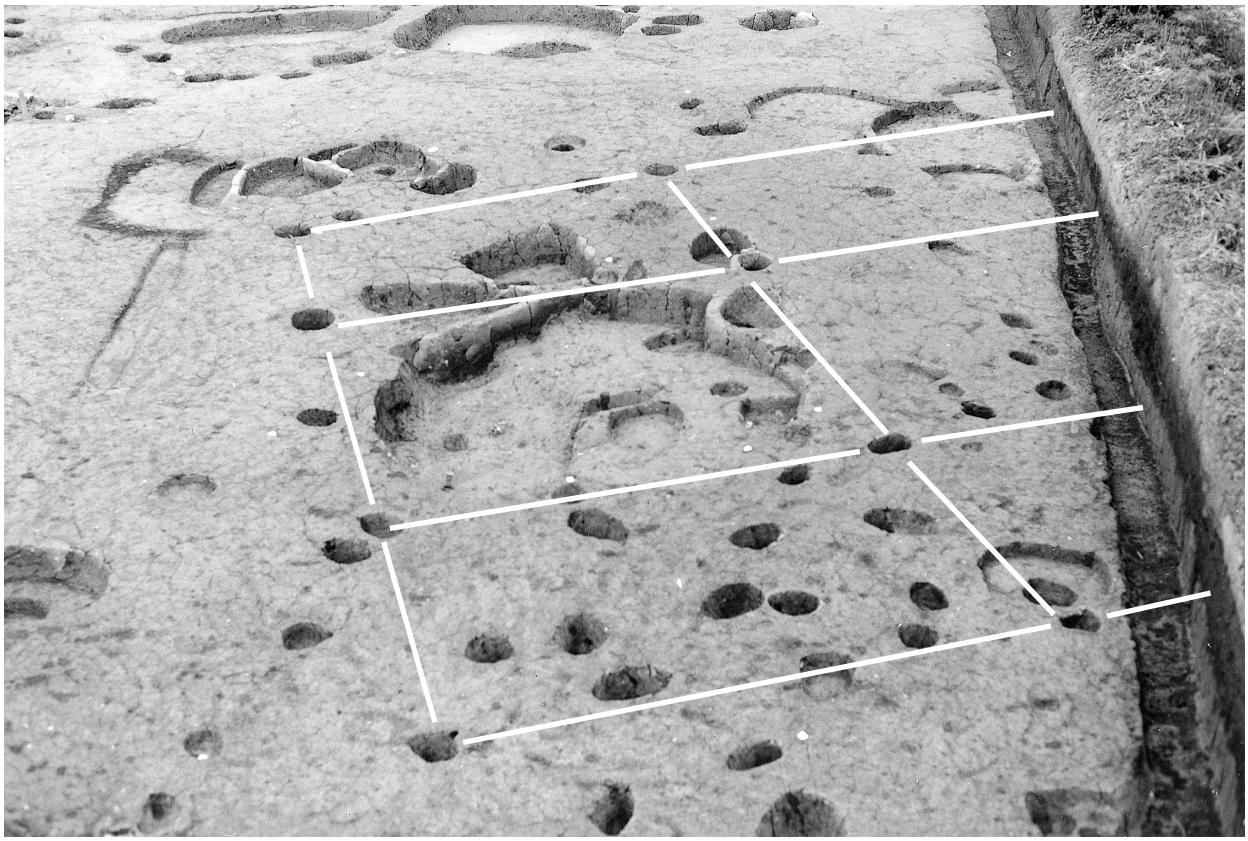
調査区全景（東から）

調査区全景（西から）

図版３　戸井口遺跡



ＳＢ27

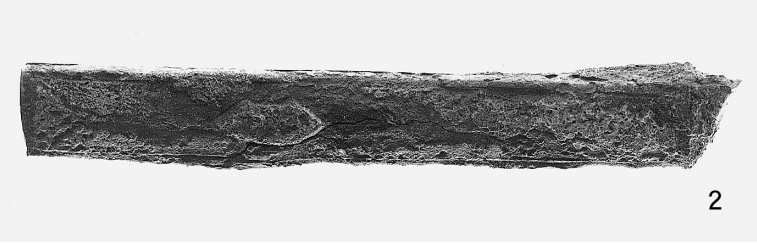


ＳＢ28

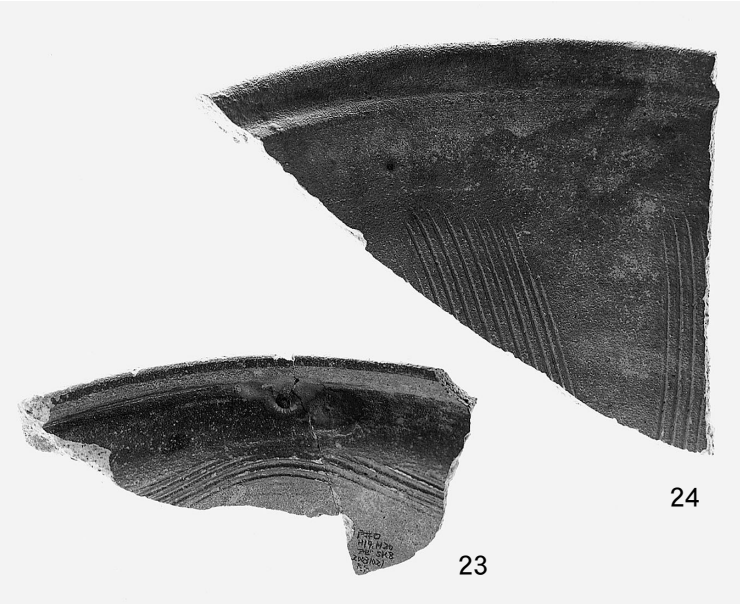
ＳＫ８ 遺物出土状況

ＳＫ10 遺物出土状況

図版５　戸井口遺跡



出土遺物①



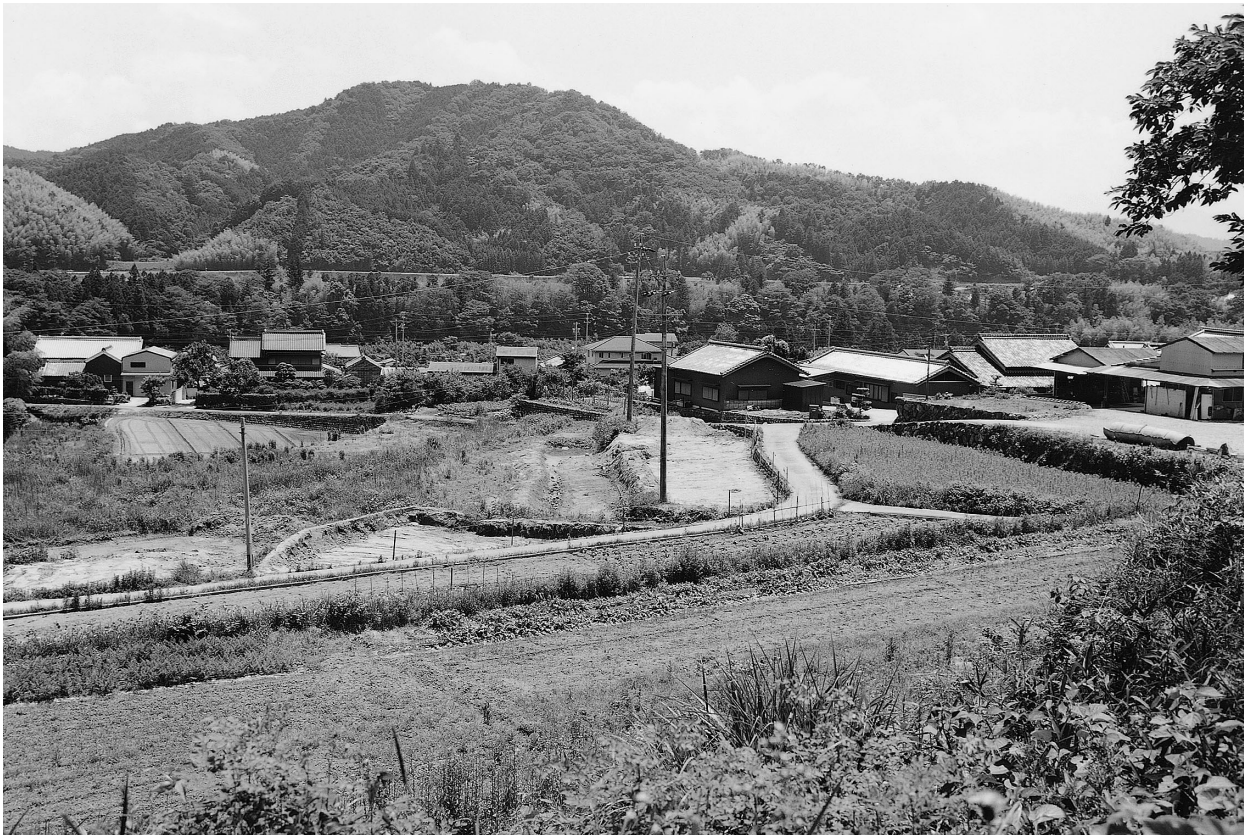
出土遺物②

図版７　スブクリ遺跡

Ａ地区調査前風景（東から）

Ａ地区全景（北東から）

Ｂ～Ｅ地区遠景（南西から）



Ｆ・Ｇ地区遠景（北西から）

図版９　スブクリ遺跡

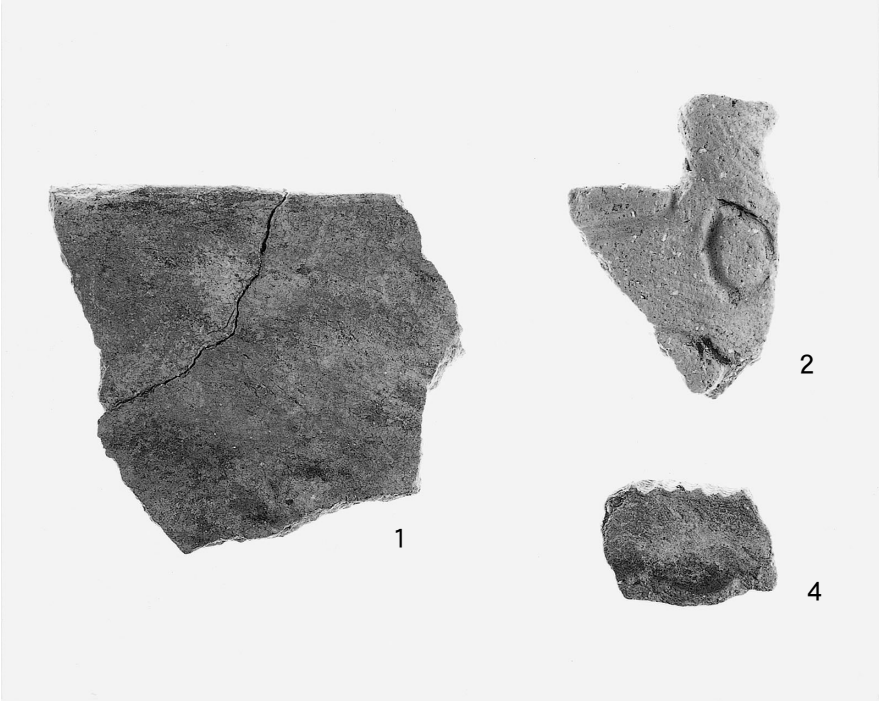
Ｂ地区全景（東から）

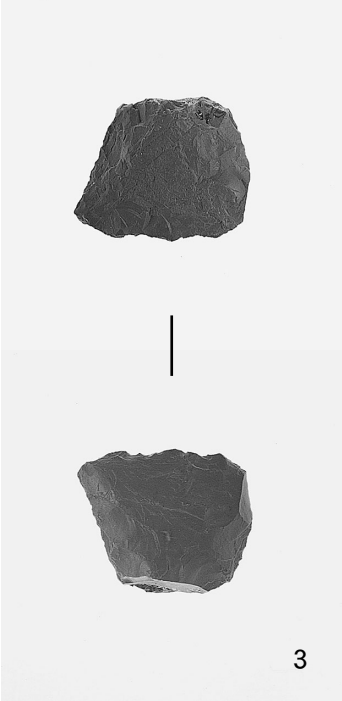
Ｃ地区全景（西から）

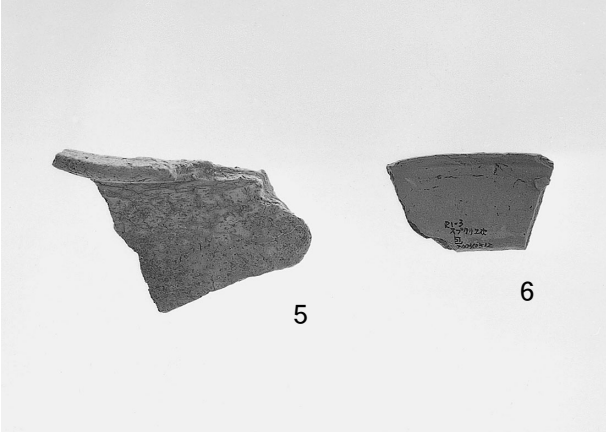
Ｅ地区全景（東から）

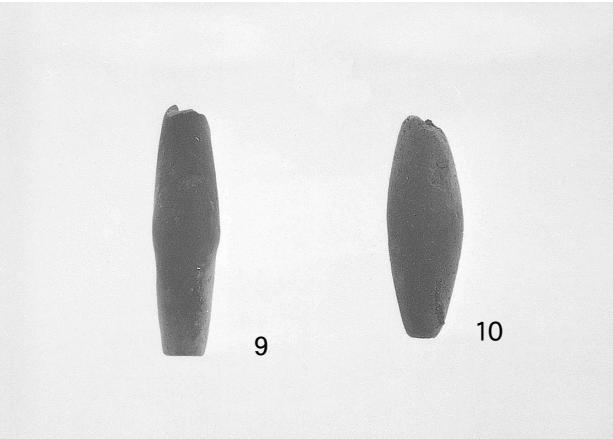
Ｆ地区全景（南から）

図版11　スブクリ遺跡・広瀬中田遺跡









スブクリ遺跡（第２次・１～７）　**広瀬中田遺跡**（８～10）

報告書抄録

ふりがな	といぐちいせき・すぶくりいせき(いちじ・にじ)はっくつちょうさほうこく
書名	戸井口遺跡・スブクリ遺跡（１・２次）発掘調査報告
副書名	
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	２６４
編著者名	奥野　実・小山　憲一・大村　伸一・新名　強
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒　515-0325　　三重県多気郡明和町竹川５０３　　℡　0596(52)7031
発行年月日	２００５年１２月２０日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
戸井口遺跡（といぐちいせき）	松阪市（まつさかし） 広瀬町字戸井口（ひろせちょうあざといぐち）	204	未登録	34度 30分 28秒	136度 29分 08秒	20030516～ 20031125	2,630	県ほ
スブクリ遺跡	松阪市（まつさかし） 広瀬町字スブクリ（ひろせちょうあざすぶくり）	204	未登録	35度 59分 54秒	136度 29分 08秒	20030818～ 20030826	407	県ほ
				34度 30分 10秒	136度 29分 19秒	20040507～ 20040509	900	県ほ

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
戸井口遺跡	集落跡	江戸	掘立柱建物・土坑・溝	縄文土器・弥生土器・土師器　・陶器	江戸時代前期の掘立柱建物２棟を確認
スブクリ遺跡	集落跡	縄文後期 鎌倉・室町	溝・ピット・落ち込み 落ち込み	石鏃・縄文土器・青磁・土師器	

要約		
	井戸口	平成14年に新規に発見された遺跡。土坑を伴う掘立柱建物跡２棟等の近世農山村部での民家跡を確認。近世遺物として形の良い土師質の十能?や天目茶椀が出土。
	スブクリ１次	谷筋の湿地の埋立地。遺構なし。
	スブクリ２次	筋を挟んだ東西の尾根上に、若干の遺構や遺物が確認した。東側の尾根では、石鏃や縄文土器が出土したが、明確な縄文時代の遺構は確認されず、周辺に縄文集落が展開するものと考えられる。西側尾根では、溝やピットを確認したが、遺構は不明である。

三重県埋蔵文化財調査報告　264

戸井口遺跡・スブクリ遺跡（第１・２次）
発掘調査報告

2005（平成17）年12月

編集発行　三重県埋蔵文化財センター
印　　刷　㈲　山　文　印　刷